

教職大学院 Newsletter

No.197

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科 since2008.4 2025.7.26(公開版)

安居中学校 Agencyへの挑戦

福井市安居中学校 校長 森田 史生

4月に教職大学院から安居中学校に異動になり4ヶ月。教職大学院勤務の3年間、安居中学校の担当として院生サポートや校内研究・研究大会参画などに携わり、安居中学校のことは知っていたつもりではあったが、外から見るのと内部から見るのは大きく違っていた。この4ヶ月で体感した安居中学校の学びの場とAgencyに向けた取り組みを紹介したい。

本校は1学年1クラスの小規模校である。専任教員は5教科+体育、技術で、音・美・家は専任教員以外が担当している。学校は福井市の西部に位置し、地区を流れる末更毛川流域に細長く田畑が広がる自然豊かな地域である。地域と密着した学校で、地域の人たちと協働した学年プロジェクトも活発に行われている。さらに、教職大学院の拠点校として教職大学院と連携しながら学校づくり、授業づくり、教師教育など協働研究を進めてきている。

生徒が主体のAgencyを育む学校

平成24年(2012)新校舎が建築され、安居小中学校から分離独立し、教科センター方式を採用して開校した。県内には教科センター方式の中学校が3校あるが、本校の特色としては、「全校一体型教科センター方式」として、生徒全員が一体となって学び合う場、あらゆる活動が一体となって個の成長を促す学びの場となるような構造になっている。

特徴ある校舎と小規模校の利点を生かし、一人一人が探究的な学びができる環境の中で育んでいくのは、「社会参画型学力の育成」である。これからの予測不可能な社会の中で、他者と協働してよりよいものを創り上げながら、自らの意志で生き抜くことができる人材を育成する。さらに、安居中学校が、安居地区の「学びの文化拠点」となり、安居地区の発展に寄与する人材の育成を目指している。これを実現するための学校教育目標は「志を持って、挑戦し続ける生徒の育成」である。「風の広場」にはこの目標が大きく掲げられ、教職員だけでなく、生徒もこの目標を意識して取り組んでいる。4月新入生に向けた生徒会長の最初の言葉は「安居中は生徒が主体の学校」「Agencyを発揮する学校」だった。生徒も常に自分たちが主体となって学校をよりよくする意識で活動している。「Agency」に合わせて「挑戦」「絆」「個性」という言葉も生徒全員の合言葉として大切にされている。

学校教育目標を具現化するためには、教育活動

内容

巻頭言	(1)
院生自己紹介	(3)
コースだより	(13)
インターンシップ/金曜カンファレンス報告	(18)
月間合同カンファレンス報告	(24)
特集号	(34)
お知らせ	(36)

全体が目標に向かうような学校運営が必要となる。組織、分掌はもちろんだが、各活動の目標が同じ方向性を持っていることも重要である。研究主題だけでなく、各教科でつける力の明確化、時間をかけて設定する学級目標、生徒が設定する生徒会活動、学年プロジェクトの目標など、教職員、生徒が意識して設定することで系統的な活動となり、3年間のグランドデザインの中でカリキュラムが編成されることにつながっていくと感じている。

地域と協働するプロジェクト学習

プロジェクト学習は学年ごとに取り組み、3年間で安居地区がよりよい地区になるようテーマを決め、年間3サイクル、3年間のロングスパンのカリキュラムでデザインしている。4月に「地域のお悩み相談会」を開き、地域の人たちの願いや悩みを聞き、自分たちに何ができるかを考え、そこから地域の人たちと共にプロジェクトを進めていく。2年生は先月「ホタル鑑賞会」を開いた。ホタルは地区の宝として地区を挙げて保全に取り組んでいる。1年生では水質調査など自然環境を守る活動を中心に進めてきた。2年生になり、鑑賞会前には暗くなる道に誘導灯を設置し、当日は地区内外から参加した多くの人たちにホタルの生態、特徴などを紹介した後、近くの川に誘導し、地域の人と共にホタルの魅力を発信することができた。

自己を見つめ生き方を探る「My Learning」

プロジェクト学習のサイクルの切り替わりである11月と2月の2回「My Learning」を行っている。これは、各自が学校生活の中でテーマを持って、長い時間の活動の振り返りを行い、異学年、小学生、保護者、地域の人にポスターセッション形式で発表し、意見や助言をもらいながら、自己を見つめる場になっている。振り返るための記録を残し、自分を捉え直していくことは、生き方を探るキャリア教育そのものになっている。

Agency を育む研究

研究主題は令和2年度より「Agency」をテーマに掲げ、主体的な生徒の育成を中心に研究を進めてきている。本年度は、「Agency への挑戦～主体的なAARサイクルの活用を目指して」とし、AARサイクル「見通し-行動-振り返り」の探究型学びのサイクルを教科の学びに挑戦することに取り組んでいる。教科の学びにスポットを当てるのは、教員からの声からだった。探究的なプロジェクト学習においては、生徒自ら課題を持ち、協働で解決するための構想を練り、行動し、振り返りの中から新たな課題を発見する。その中で地域の人たちとの協働も生み出されている。プロジェクト学習ではAARサイクルが多重に展開され、生徒が生き生きと活動し、まさに「Agency」が発揮される学びになっている。「この学びの姿を教科の学びにも生かさないか？いや、生かさないといけない！」という思いから、単元を通した学びの中で探究型AARサイクルをマルチループになるようなデザインにしていくことから取り組んでいる。研究推進委員会は週に1回、全体研究会は月1回開催し、教職大学院からも参加をいただき、協働研究を進めている。A（見通し部会）、A（行動部会）、R（振り返り部会）の3部会で相互に授業を見合い、実践をもとに教科の学びがAARサイクルになるよう探究している。さらに、同じ教科センター方式の至民中学校との協働研究も展開する予定である。

今年度、本校ではミドルリーダー養成コースM2の竹内教諭、授業研究・教職専門性開発コースM2の梅田院生、M1の多田院生の3人が教職大学院の学びと安居中の学びをつなげ、学校に新しい風を吹かせてくれている。さらに連携を深めながら、公立学校から教科の探究の取り組みを発信していきたいと考えている。今年度、11月21日（金）に本校研究発表会にて「My Learning」「授業公開・研究会」を開催するので、是非安居中学校の取り組みを見にきていただきたい。



院生自己紹介



学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

赤尾 昌倫 (あかお まさみち)

窓から見える一面の青に広がる雲海。今、福岡空港行きの飛行機の中から、自己紹介を書いている。今回、福岡県に訪れるのは、ホッケー競技のナショナルアスリートパスウェイ構築事業の育成プログラムに参加するためである。簡単に言うとポテンシャルの高い中学生を発掘し、将来のオリンピック選手を育成しようという事業である。中学校の教員になると、よく「専門は？」と聞かれることがあり、2つの意味をもつことが多い。1つは、「教科」に関して。もう1つは、これまでのスポーツや習い事の「経歴」に関して。前者は教員として当然であるが、後者は部活動を担当することになると、その専門性を問うために聞かれる。その私の専門は、教科は社会科と保健体育科、スポーツがホッケー競技になる。そして、自身の専門性を生かして、この福岡の事業に関わって4年目になるが、その指導の在り方は常に変化しているように思う（“変化”というより私の中では“アップグレード”しているつもりだが）。その変化の要因としてあげられるのが、現任校への赴任である。

子供が主役、子供が主体の授業づくり。教えるー教えられる関係から共に学ぶ関係への転換。子供の見取りから展開される単元デザイン。思考と試行の往還から深めていく探究活動。自他ともに認め合いながら目指す協創。どれも現任校で、授業実践を中心とした教育活動の中で常に大切にしていることである。これらは、「教育」という活動現場、全てにあてはまるのではないかと思う。それは、もちろん部活動や家庭においても、それが「教育」であるなら当てはまる。4年にわたる福岡でのホッケー指導も同じで、

選手が練習の主体であり、選手を見取ったところからプログラムがスタートし、こちらが一方向的に教える練習ではなく、共に考え一緒に創る練習を展開している。目指しているのは、自分で考え、判断し、個の能力を最大に発揮できる自立した選手だ。学校内の生徒と同じだと思う。

今年は、更に自分自身の見聞を広げ、今もなお学びの主体者でありたいと教職大学院への入学を決めた。学校改革マネジメントコースでは、学校組織を管理するという視点で学校自体を捉えたり、関わったりした経験が少ないこともあり、これから新たな学びや気づきがあると思うと期待感が膨らむ。また、月間カンファレンスでは、様々な校種の方や県外の方の話が聞けたり、実践報告書作成では改めてこれまでの自分の歩みを振り返り、捉え直したりすることは、貴重な経験となるだろう。多くの学びや人との出会いを楽しみたい。そして、今年1年の教職大学院での学びが、現在の学校だけでなく、今後異動した先の学校で必ず生かされると思う。教育観、教師観、指導観、授業観、あるいは学校観といった、その時その場所に観の転換が必要になったとき、現任校での研究体制も踏まえ、教職大学院での学びを発展させていきたい。

「当機はまもなく着陸態勢に入ります」のアナウンスが流れる。今日の福岡の天気は晴れ。気温は33℃を超えるらしい。熱中症に気をつけながらも、ホッケーを教えてもらうことを楽しみにしている選手たちの期待を裏切り、一緒に練習を創っていく楽しさを味わってもらおうと思う。

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/日之出小学校

岩佐 直美 (いわさ なおみ)

私の校長としての任期は、残り1年半です。「この年齢になって、今から教職大学院に行って学ばないてえらいね」と校長仲間から言われたこともあります。もっと早く学んでいれば、学んだことをもっとたくさん現場に還元することができたかもしれません。しかし、私にとっては、今がそのタイミングだったのだと思っています。私は新採用から4年間は小学校で、そして、中学校へ行きたいという希望を出して、二十数年間国語教師として中学校で生徒と向き合ってきました。周りの先輩や仲間が教職大学院で学んでいるということを聞き、教職大学院に興味をもったこともあります。当時の私は、日々の授業をどうするか、目の前の生徒をどう育てるかということで手一杯で、教職大学院で自分の視野を広げてみようという気持ちまでにはなれませんでしたし、自分が学びたいことも見つかっていませんでした。

そんな私がなぜ今さら教職大学院で学ぼうという気持ちになったのか。令和5年度、私は教頭として同じ市内の社北小学校へ赴任しました。社北小学校は教職員の大異動が数年続いていた上に、校長、教頭、教務主任も一度に入れ替わり、教職員のチーム力を高めることが喫緊の課題でした。そんな中で、校長のリーダーシップの下、どのように教職員の意識改革を行い、同僚生を育み、チーム力を高めるのか。どのように学校をつくっていくのか。一緒に学校づくりに取り組んでいく中で、学校経営で大切なことをたくさん学ばせてもらいました。また、社北小学校の校長は自身が教職大学院で学んでいたこともあり、校長からは本当に多くの刺激を受け、自分自身も学び続ける管理職でありたいと強く思うようになりました。

昨年度、令和3年度と4年度に教頭として働いていた日之出小学校の校長を拝命し、自分が思い描く「共に学び共に育つ、つながりと対話を大切にした学校づくり」や「学び合う教職員集団づくり」を中心に学校運営を進めてきました。しかし、日之出小学校

では、私が不在だった一年間で、急速に働き方改革が進み、教職員にとって働きやすい学校にはなったものの、業務改善が本当に子どもに還元され、教師の資質向上につながっているかという、そうとは言い切れない現状があります。

そのため、「働きやすい」学校から「真の働きがいを感じられる」学校づくりを目指して、学校改革に取り組みたいと考え、私は今年度、目指す学校の姿として、「子どもも教職員も一人一人が輝き、みんながワクワクできる学校」を掲げました。教員が「働きがい」を感じられるのは、目の前の子供たちの成長が見られる時です。しかし、その成長は、新しい時代に求められる資質・能力を踏まえたものでなくてはなりません。めざす児童の姿を明確にし、新しい時代に求められる資質・能力を身に付けられるような授業をはじめとするさまざまな教育活動を進めていきたいと考えています。そのために、私は、教師の観の転換、意識改革を行い、子どもたちに今求められている資質・能力を育てるために「子どもが主役」の学校づくりに取り組んでいきたいと思います。結果や出来映え重視ではなく、作り上げる過程を重視し、子どもたちが失敗を重ねながら、自分たちで考えやり遂げ、達成感を味わえるように、子どもたちに寄り添う姿勢を大切にしていきたいです。また、「一人一研究」で教員一人一人の自律的な学びを大切にし、個人の実践をもとにした対話を通して、協働的な学びをつくってきたいです。

学校づくりは、校長の思いだけでどうにかなるものではありません。いかに自分の思いを教職員に伝え、仲間を増やし、思いを一つにして教職員が自ら動き出せるかが大切です。そのために方向性を示し、きっかけや場をつくり、教職員が取り組みやすくするのが校長の役割ではないかと思っています。働きやすさと働きがいの両立は簡単なことではありません。特に教職員の意識改革は難しいものです。しかし、「子どもも教職員も一人一人が輝き、みんながワクワク

ワクできる学校」を目指して、教職大学院でたくさんの方と語り合い、多くの刺激を受け、自分の学びを深

めていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)／福井県教育総合研究所

嶋田 美幸 (しまだ みゆき)

学校改革マネジメントコースの嶋田美幸と申します。教育総合研究所へ異動になって2年目、今年度は初任者研修を担当しております。研究所には3つのセンターがあり、私の所属する教職研修センターでは、初任者研修をはじめ、幼稚園・認定こども園新規採用教員研修や中堅教諭等資質向上研修など教員向けの研修を運営したり設計したりしています。現場を離れ、さまざまな世代の研修に受講者とともに参加すると、とても勉強になります。研究所勤務1年目にそのような学びの機会を得て、教職大学院の存在にも気づき、入学の運びとなりました。今でも、初めてラウンドテーブルに参加した時に感じたワクワク感や、もっと早く知りたかったと感じた気持ちを思い出します。

担当している初任者研修を通じて、自分が初任者だったころとは違う最近の教育動向を知ったり、ファシリテーターをする機会には若手教員の皆さんが仕事の中で何を感じ、どんな考えをもつのかということに触れたりしています。私は中学校現場が長いのですが、中学校教員だけでなくさまざまな校種の先生方と話せることで、教わることも多いです。小学校の先生方のきめ細やかな見とり、高校の先生方の

高い専門性に驚かされることも多いです。「井の中の蛙でいてはいけない、常に新しい学びを求め続けたい」と自分に言い聞かせる日々です。この教職大学院でも、さまざまなバックグラウンドをもつ方々と語り合うことができるのが嬉しいです。現場で凝り固まっていた思考を柔軟にさせていただいていることに感謝です。

教員研修は、担当者が1人で運営しているものではありません。県庁や市町の教育委員会、大学や民間企業、そして所員の皆さんと、多くの人を巻き込んで協働して行う仕事です。多くの人の思いをベクトルがそろそろ束ねて、マネジメントしていくことが私の仕事です。よい研修とは何か、どのようにすると受講者のみなさんの学びにつながるか、常に考えながら、仕事をしながら学びを深めています。現場と異なり子どもたちの声は研究所にはありませんが、私が汗を流すことで受講者のみなさんが向き合っている子どもたちの成長につながることを信じて業務に臨んでいます。

まだまだ未熟ではありますが、教職大学院での学びをつないでいけるよう励もうと思います。1年という短い期間ですが、どうぞよろしくお願いします。

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)／敦賀市立中郷小学校

清水 裕子 (しみず ゆうこ)

こんにちは。今年度より福井大学連合教職大学院の学校改革マネジメントコースに入学しました、清

水裕子と申します。現在、敦賀市立中郷小学校に勤務しております。よろしくお願いします。

採用されてから、5校目の小学校となりました。最近では高学年担任が多く、特にコロナ禍の2020年から4年連続で6年生を担当させていただいたのは、貴重な経験となっています。

2020年の2月末、5年生担任として「6年生を送る会」を開催した次の日からの全国一斉休校。「先生、6年生の卒業式ってどうなるの」「修了式には、また登校できるようになってるかな」「お母さんが、不織布のマスクでも洗って使えるかなって言ってたわ」教室で子どもたちとそんな会話をしたことを今でも覚えています。そして休校のまま新学期がスタート。持ち上がって6年生の担任となった私は、最高学年としての1年間でどのような日々にしていくか、その思いでいっぱいでした。かつて担任をした子たちが、インターハイの中止などさまざまな場面でその集大成の場を失っていることも知り、なんとも苦しい気持ちになりました。そんな4月に入学したのが、今年度担任をしている6年生の子どもたちです。

さて2025年5月19日（月）の福井新聞の一面には『万博へ校外学習 23校』と題した記事が掲載されました。本校は、そのうちの1校にあたります。修学旅行の行き先として計画を進めていました。

新聞掲載から1か月後の6月19日（木）、修学旅行の1日目に、いよいよ大阪・関西万博に向かいました。この日は梅雨にもかかわらず異例の暑さで、大阪の気温は34℃。到着は14時。ゲート前に並ぶ万国旗に目を奪われながらも、西ゲートから入場し、巨大なガンダムの前で集合写真を撮りました。すでに会場内は多くの人と熱気であふれていました。大屋根リングの日陰を頼りに移動しながら、団体予約の三菱未来館へと向かいます。三菱未来館では、大迫力のスクリーンと映像で地球のこれまでとこれからを巡りました。万博テーマ「いのち」が小学生にも分かりやすく伝わる内容となっており、子どもたちは歓声を

あげながら命を巡る旅を楽しんでいました。何より、涼しい室内でゆったりとしたソファに座って映像を見るというスタイルの展示は、猛暑の中で子どもたちを引率している者としては大変にありがたいことでした。

三菱未来館を体験した後は、班別研修です。記録用のデジカメと連絡用の携帯電話を班に1台ずつ持って、思い思いの場所へ。行列に並んで海外パビリオンへ入った班、コモンズ館でたくさんの国のスタンプを集めた班、パビリオンをPRする外国人と仲良くなってそのセリフを覚えてきた班。未来の社会や地、各国の文化をテーマにした展示に、子どもたちは興味津々。なかには、出会った外国の方に自分から話しかけて英語で交流している子もいました。

デジカメではさまざまな建造物を撮影していました。やはり多いのは、大屋根リングの構造を撮影したもの。さらに各国のパビリオンが写されていました。アメリカ館、フランス館、アイルランド館…。アゼルバイジャン館は、その美しくかつ迫力のある外観に目を奪われたのか、ほぼすべての班が撮影していました。ミャクミャクのマンホールやカラフルなトイレの外観も写っていました。また、各国の調度品の写真も多くありました。それらとともに写る子どもたちの笑顔。

修学旅行から帰った子どもたちは今、万博で知ったことや感じたこと、そこから考えていきたいことなどをまとめ、4・5年生に向けて発表する準備をしています。探究学習へのつながりにも期待して。

今一緒にいる仲間との、今しかできない経験を大切にしたい。そんな思いが私の中には強くあります。教職大学院での学びも同じです。できるときに、できることを、今いる仲間とともに。1年間、どうぞよろしくお願いします。

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/福井県教育庁嶺南教育事務所

下島 瑞恵 (しもじま みずえ)

はじめまして。下島瑞恵と申します。今年度、福井大学教職大学院学校改革マネジメントコースに入学しました。採用から約20年間、小学校や中学校で勤務してきました。そして3年前に、福井県教育庁嶺南教育事務所という教育行政機関に異動し、学校支援などのさまざまな業務に携わっています。そしてこの異動が、「大学院で学びたい」と思ったきっかけになりました。

3年前、それまで当たり前だった学校での子どもたちとの生活が一変。初めての教育行政での業務に戸惑うばかりでした。教材研究や授業、学級経営、校務分掌に追われながらも、子どもたちとの学校生活に充実感があっただけに、身近なところで子どもたちの成長を感じられなくなってしまうこと、直接的なかわりが減ってしまうことに寂しさを感じました。すぐに前向きになることができずにいました。そんな時、当時の所長が、「直接子どもたちに接する機会は減ってしまうかもしれないが、ここでの仕事が、間接的に子どもたちの成長につながることもあるのでは・・・」という言葉をかけてくださいました。私ははっとしました。直接的でなくても、学校訪問で先生方と一緒に子どもたちに育みたい力について考えていくこと、一緒に授業づくりをしていくことなど、さまざまな業務にどう向き合うかによって、学校とのつながりをつくることができるのではないか、子どもたちの学びにかかわることができるのではないかと考えるようになりました。さらに、ここでの気づきや学びを、今後の学校生活に生かしていけるよう、前向きに取り組もうという気持ちに少しずつ変化していきました。

そして、現在の職場では、普段はそれぞれの業務に黙々と取り組んでいます。課内で大事にしていること、国や県の教育施策の確認、学校訪問の持ち方、そこで伝えたいことなど、共通理解を図りながら進

める必要があることは、課内で対話し、考えを整理したりまとめたり、最適解を模索したりしながら協働しています。課内のメンバーと対話する時間は、「なるほど、そんな考え方もある」という新たな視点に気付かせてくれます。また、散らかっていた自分の考えを整理することができ、充実したものになっています。前任校で研究主任だった時に、「目的を共有しながらすすめることができなかった」「同僚との対話が足りなかった」と考えていた私は、課内のメンバーの存在によって、「対話」の大切さを改めて感じる事ができました。

このように、自身の気持ちの変化、対話の大切さを実感したことで、さらなる考えが生まれてきました。1つは、「今後に生かしていくために、これまでの実践を振り返りたい」ということです。じっくり省察し、私は、何がきっかけでどう変わってきたのか、どうしてうまくいかなかったのか、今後何を大事にしていくなかなどを考えていきたいと思っています。もう1つは、「もっといろいろな人との対話を通して、自分の考えを広げたり深めたりしたい」という思いです。現在、カンファレンスでは、自分の思いや考えをうまくアウトプットできずに苦戦することもあります。毎回、新たな視点や、自分のこれまでの考えとのつながりに気付くことができています。

おそらく、今の職場に来ることになっていなかったら、教職大学院の門をたたくことはなかったかもしれません。このような学びの機会を持たせていただいたことに感謝しながら、限られた時間の中で精いっぱいさまざまな立場の方との対話を楽しみ、立ち止まって考え、綴り、正解はないかもしれないけれど、考えたことを今後の実践に生かしていけたらいいなと感じています。さらに、「自身が学び続ける」だけでなく、「学び続ける組織づくり」についても目を向けていきたいです。

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

高井 茂嘉 (たかい しげよし)

みなさん、こんにちは。学校改革マネジメント1年履修の高井茂嘉と申します。現在は福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程で教務主任を務めています。毎日時間割とにらめっこし、学校行事と照らし合わせながら、先生方にとって最適な時間割を模索する業務に取り組んでいます。また、9年部会に所属し、指導部を担当しています。多感な時期にある子供たちと向き合う中で、生徒指導上の課題が生じることもあります。指導部を中心に連携を図りながら、早期解決を目指して取り組んでいます。部活動では、男子ソフトテニス部の顧問として、3年連続北信越大会出場、2年連続全国大会出場という成果を収めることができました。子供たちと共に夢を追いかける時間は、私にとってかけがえのない経験となりました。今年度は男女ソフトテニス部の副顧問として、顧問の先生や子供たちをサポートしています。教科は技術科を担当しており、今年度の実践では、福井大学の足利先生と連携しながら、情報分野のプログラミング学習に取り組んでいます。授業で生じた課題について話し合いながら、よりよい教材の開発に努めています。

私が教職大学院への進学を決意したきっかけは、ある先輩教員の言葉でした。本校の教員は毎年教職大学院に入学しており、私も附属に赴任してから5年の間に何回か打診がありました。しかし、その時は毎日の授業や部活動で精いっぱい、教職大学院で学ぼうとする余裕がありませんでした。そんな私の意識が変わったのは昨年のことです。教職大学院で学んでいたY先生との会話の中で、「時間は自分で作るものだ。いくら忙しくても自分で学ぼうとすると時間を見つけることができる。その意欲がもし

もあるのならば、ぜひ行ったほうがいい。学ぶことはたくさんあるし、行った後、後悔することは絶対にない。」という言葉いただきました。その言葉に背中を押され、時間がないことを理由に学びから逃げていた自分に気づき、改めて自分自身を見つめ直すため、そして成長のために進学を決意しました。

教職大学院では、昨年度の事前履修から今年度のカンファレンスの中で、これまでにない多くの学びを得ることができました。今までに読んだことのない架橋理論書や他者の長期実践記録をじっくり読んだり、教育の本質や現代の教育課題を知ったりなど、新たな視点を獲得することができました。しかし、それ以上に心に残っているのは、他校の先生方や教職大学院の先生方と語り合う時間の豊かさです。教員を志す若い大学院生の方々が語る将来への展望や悩みに耳を傾けると、かつての自分を思い出し、自然と初心に立ち返るような気持ちになります。また、同年代の先生方との対話は、共感や刺激に満ちており、自分自身の教育観や実践を見つめ直す貴重な機会となっています。こうした交流を通じて、今まで気付かなかった自分の可能性や課題に向き合うことができ、新たな自分を発見することができました。そして、大学院の先生方は私たちの話に丁寧に耳を傾け、今後の指針を示してください。このような恵まれた環境で1年間学べることを心から嬉しく思っております。

長期実践の執筆に対しては、まだまだ不安もありますが、多くの先生方と関わり合い、共に学び合えるこの教職大学院での1年間を大切に、実りある学びを積み重ねていきたいと考えています。今年1年間、どうぞよろしくお願いいたします。

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/福井県立南越特別支援学校

濱本 さとみ (はまもと さとみ)

1996年に教員となり、約30年の教員生活となります。2024年3月まで高校の保健体育教員として、授業や担任はもちろんですが、ソフトボール部の顧問として部活動指導に情熱を注いでいました。時間外活動や休日業務量は莫大でしたので、働き方改革で敬遠される気持ちも十分にわかります。一方、子どもが目標に向けて試行錯誤し、悩みながら限界を超えようとする姿を毎日見ることができました。そのような生徒と日常を一緒に歩めるすばらしい機会であった部活動の指導を完全に外すには惜しいとも感じます。という話をすると、「学生時代に部活動に打ち込んでいたから、専門家だからそんなことが言えるんだ」という声が聞こえてきそうです。確かに中・高とソフトボール部に所属していましたが、弱小チームでちゃんと指導してもらった記憶がありません。指導者となり「選手のために自分に何ができるか？」を追求し、技術や戦術、トレーニング、メンタルなど壁にぶつくと興味がわいてきて、本を読み漁り、全国各地に出向いて学び、生徒に還元する日々でした。選手が県で優勝して全国大会に出る姿を時々見られたことは、選手だけではなく自分へのご褒美としていい思い出であり、行き着くまでの過程は今の自己形成に大きく役立っています。振り返ると、部活動を通して自分が『探究学習』をやっていたように思います。

2019年から教育委員会に在籍し、2021年に福井県を中心開催県とした全国高校総体が53年ぶりに開かれるため、総体準備室に入り全体運営の業務をしていました。2020年度からはソフトボールの競技運営の主担当として敦賀市へ派遣されることになりました。今やっている仕事を手放し、新たな仕事に入るのは複雑な気分でしたが、「環境は自分自身では変えられない。このことを考えていても仕方がない。」「今自分に求められていることに集中する。」と気持ちを新たに仕事に向かいました。コロナ禍で前年度の全

国総体は中止で視察なし、対策のため先催県のやり方はすべて見直しという逆風しかない運営となりました。しかし、前年度踏襲の大会ではなく一から考えて決めていく仕事は面白く、残業続きの日々となりましたが「働きがい」を感じた業務でした。

直接生徒とともに駆け抜けた時代、生徒の活動を間接的に支える大会運営を経験した時代を経て、学校現場に戻った時、校長からマネジメント研修へのお誘いがありました。そして校内で学校改革マネジメントユニットが結成され、校務分掌を超えた学校改革の提案をする場が与えられました。これが学校組織について考えるようになったきっかけです。今まで部活動の指導を言い訳にして大した勉強をしてこなかった私には、今の学校が求められているものやこれからの学校について学び考える時間、そして今の勤務校で何を提案するかをチームで考える時間は新鮮で楽しいものでした。

このような経験を経て、今は教頭として南越特別支援学校で勤務しています。特別支援学校は初めての校種ですので、知識も経験も全く足りません。児童生徒の対応を求められると、正直戸惑うことが多く丁寧に説明してもらわないと何もできません。しかし、児童生徒の様子を見てみると、行動に違いがあるものの今まで接してきた高校生たちと本質は何ら変わらないと感じています。そして、今まで何も知らなかった自分に疑問を持つようになりました。ここ数年で「多様性」という言葉があちこちで使われるようになり、違う価値観や考え方にも理解が深まってきました。しかし、障がいを持った方たちは、今でも社会から少し離れたところにいるような気がします。この教職大学院での学びを通して、社会全体を考えながら共生社会、多様性を認める社会に向けて学校、教職員へのアプローチをしたいと考えています。皆様からの忌憚のない意見や感想、助言を楽しみにしています。

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

堀 歩美 (ほり あゆみ)

学校改革マネジメントコース1年履修の堀歩美と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

現在、2年連続で小学校1年生の担任をしています。入学から3ヶ月が過ぎましたが、子どもたちはまだまだ甘えん坊です。くっついてきたり、知らない間に私の椅子に座っていたり。月曜日の朝は、お母さんと離れられずに涙する子もいます。スタートカリキュラムの中で、幼児期から学童期への接続を大切にしながら取り組んでいます。子どもにとってその変化はとてつもなく大きなものであり、「毎日、本当によく頑張っているな」と感じる日々です。「学校に来てよかった」「今日も楽しかった」と思える毎日をつくること。そのために、日々の生活や関わりを積み重ねています。

並行して、現在は6年生の算数にも出入りしています。毎日、1年生と6年生を行き来しながら授業を行う生活は、異なる発達段階の子どもたちに寄り添う難しさと学びの深さを教えてくれます。1年生の授業づくりは楽しく、工夫次第で子どもたちは120%のやる気で応えてくれます。比較的シンプルな仕掛けであっても十分に機能し、こちらのわくわくがそのまま伝わっていく感覚があります。授業を考える時間は、アイデアにあふれ、とても幸せなひとときです。一方で、6年生の算数には葛藤があります。これまで私は「楽しく分かる」ことを大切に授業をつくってきました。それなりの成果と満足もありましたが、今の学校ではその方法が通用しませんでした。これからの世の中を生きていく子供たちにはたった一つの正解ではなく、学びのプロセスが大事だということとは年々身に染みて感じるようになりました。今、子どもたちに必要なのは、「考えることを楽しむ」授業、身近な出来事の中の算数を見だし、課題解決やよりよい生活に結びつけられるような、実感を伴った“生きた学び”なのだと痛感しています。それは頭では分かっている、いざ授業をすると、かつての「すべてを教えなければ」という自分が顔を出し、つ

い話しすぎてしまうこともあります。6年生の関心を引き出す深い学びをつくるには、より広く深い教科の知見が必要なのだと思い知らされる日々です。本校に来て「自分は本当の意味で算数が好きだったのではなかった」と思い知らされました。今日の前にも、算数が好きではない子供たちがたくさんいます。そんな子供たちと共に、本当の算数の面白さを味わうことができたらいいと思います。学校改革マネジメントを学ぶ立場にありながら、こうして授業に悩み苦しむ毎日です。しかし私は、授業が面白くなれば、学級経営も学校経営もうまくいくと信じています。授業の中で子どもとつながることは、教育において何よりも大切なことだと考えています。

今年度は、新たな挑戦として、1年生の教室の隣に「好き」が詰まった遊びの広場を子どもたちと共につくるプロジェクトを始めました。自然の中の家、生き物が集まる池や花畑、大好きな果物が育つ畑…。子どもたちが自由にデザインし、思いを形にしていく姿には、可能性が満ちています。童心に帰って共に楽しみ、喜びと感動を共有しながら、「子供と共に創る学び」を広げていきたいと思っています。

人前が苦手だった私が、教師となり、このような学校で日々実践を語り合い、更に教職大学院に入学することになるとは、昔の自分が知ったらきっと驚くことでしょう。実際、日々は決してスムーズではなく、一つ一つに勇気を出し、悩み、失敗し、仲間の共感に救われながら、また一步を踏み出す毎日です。家族に心配されるほど悩みながらも、それでもなお、図太く前に進もうとしています。教職大学院では、もっともっと語ることを楽しみたいと思います。言葉足らずな私の思いをいつも理解しようとして下さり、受け止めて下さる先生方にいつも感謝の気持ちでいっぱいです。心の底から語ることが楽しいと思えたとき、自分が変わる気がします。どうぞ、よろしくお願いいたします。

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/福井大学教育学部附属幼稚園

村上 一美 (むらかみ かずみ)

4月から福井大学教育学部附属幼稚園で勤務しています、村上と申します。昨年度までは、福井市の鷹巣小学校で教頭をしていました。教頭の2年間入ると、小学校で12年間、中学校で13年間勤務してきました。また、県教育研究所で国語科の研究員として2年間、県教育庁義務教育課幼児教育支援グループで2年間、行政での経験をさせていただきました。講師時代の特別支援学級担任を含め、非常に多様な業務経験をさせていただいてきたと言えると思います。

そんな私が教職大学院で学びたいと思ったのは、教頭になったとき、管理職としてどう動けばよいか悩み、戸惑う自分がいたからです。また、そんな自分が職員からどう見られているのかも気になりました。頼りない教頭だと思われたくなかったのです。「リーダー観のとりわれ」があったのかも知れないと、今は思います。リーダーは、明確な指示で職員を動かし、決してブレないで、職員に厳しいことも言える人であるべきだというとりわれです。この教職大学院で、自分が何に対して不安なのか、では、どうしたいのかをじっくり考えたいと思いました。昨年度、事前履修として、夏期・冬期集中講座やラウンドテーブルで組織づくりに関して多くの先生方と語り合ったり、過去・現在・未来の自分を見つめ直したりする経験ができたことで、自分がどれだけ固定概念に縛られ、楽しむことを忘れていたか、気付くことができました。そして、「私らしい組織マネジメントとは何か」を探究することにしました。

それなのに、4月の異動で初めての幼稚園、初めての附属学校園の世界に飛び込んだとき、2年前と同じ感覚に襲われました。全てが知らないことだけでなく、先が見えず不安で、暗いトンネルの前で一人戸惑っているようでした。しかし、しばらくすると、「これもとられかもしれない」と思える自分がいたのです。4月カンファレンスの振り返りレポートには、「職場が変わって課題も変わった。『教師を支える』

の意味を問い直す必要があると思う。」と書いています。また、附属義務教育学校統括研究主任の川崎先生の「昨年のハーバード大学の卒業スピーチで語られた『分からないことは力だ』という言葉にも探究はつながっていると思う」というコメントを目にし、探して読んだことが記してあります。以下にそのスピーチを一部引用します。

私は「わからない」ということを選びます。そうすることで、私は質問し、耳を傾ける力を得るのです。重要な学びは、特に不確実な瞬間に、すべての答えを知っていると決めつけずに会話に耳を傾ける時に起こると信じています。

https://logmi.jp/knowledge_culture/speech/331557

不確実さはいつも不快だけれど、「知らない」「分からない」ことに、私が、そして私たちがどう向き合っていくかが大事なのだと思えるよう変化したことに気付かされます。もし、私のような何者でもない人間にも教職大学院の扉が開かれていなかったら、もし、私が教職大学院の扉を開けなかったら、このように考えることはなかったかもしれません。

今、附属幼稚園の教師たちの「難しいから（自分たちを）開き、学ばせていただく」という姿勢に大いに刺激を受けています。自信があるから公開するのではない、難しいと感じているからこそ、自らを開いて、他者から謙虚に学ぼうとする姿勢です。私も「分からない」ことから逃げたりごまかしたりせず、「分からない」ことの深淵に飛び込み、他者の声に耳を傾けながら、困難な課題に向き合い続けようと思います。そして、仲間と共に、自己を、組織を変革していけるよう努力します。

この3ヶ月間で2度「楽しいですか？」と質問されました。福井大学名誉教授の松木健一先生と牧田秀昭校長からです。どうやら、不確実で「分からない」ことに向き合うポイントはこの辺にありそうです。この教職大学院での学び合いと人との出会いは、き

っと私にとって生涯の財産となることと確信します。教師として、これまでも多様な経験をさせていただいてきた私ですが、さらに幼稚園という新たな学び

の機会を与えられたことに感謝し、子どもたち、教師たちと共に、大いに楽しみ、大いに学んでいきたいです。どうぞよろしくお願いいたします。

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/福井県立羽水高等学校

山本 卓也 (やまもと たくや)

学校改革マネジメントコース1年履修の山本卓也と申します。1年間、どうぞよろしくお願いいたします。

現在は羽水高校に勤務しており、今年度は探究特進科の主任を任されました。主任業務は教員生活で初めてであり、いろいろなことを日々勉強しながら過ごしております。

教職大学院に入学しようと思ったきっかけは、昨年度受講した「マネジメント研修」の中で、教職大学院の紹介があったことです。最初は「1年で修士が取れるなんてラッキーだ」という安易な気持ちでしたが、事前履修で夏期・冬期集中に参加し、院生の先生方と様々な話し合いをしていく中で、「もっと学んでみたい」「こんなことに挑戦してみたい」という気持ちが膨らんでいきました。今年度もすでに数回月間カンファレンスが行われましたが、毎回、様々な方の話の中から新たな気づきがあり、自分の成長につながっているのを感じております。私たちも日々学んでいかなければならないと思わされております。

この仕事を始めて20数年が経ちましたが、振り返ってみると、大きな転機となる時期が2回あったように感じます。1度目は2つ目の赴任校であった足羽高校での勤務です。自分たちの感情をストレートにぶつけてくる生徒たちに、最初はどのようにかわっていくとよいのかかなり悩みましたが、周りの先生方のサポートが大変手厚く、「チームで子どもたちを育てていく」ということを学ばせてもらいました。また、卒業後にそのまま社会人となる生徒も一定数おり、高校が社会人になる準備の最後の段階にあ

ることも強く感じました。どのような社会人に生徒たちを育てるとよいのかというのも深く考えさせられた期間でした。

2度目は、その後、高志高校に赴任したことです。ここでは赴任早々、スーパーグローバルハイスクール(SGH)の担当部署に入りました。このSGHとの出会いが、私が探究活動と出会った瞬間でもありました。全く経験したこのない「グローバル教育」と「探究活動」について自ら学ぶことはとても大変でしたが、様々な方法を試行錯誤しながら進めていくことはとても楽しく、充実した時間となりました。様々な外部機関の方々とつながりを持ったり、海外の方々とつながりを持てたりしたことも、生徒だけでなく自分も見識が広まり、ものの見方や考え方に幅を持つことができるようになりました。また各地の研究会や連絡協議会などにおいて、全国各地で同じ取り組みを行っている先生方と取り組みや悩みについて話し合い、いろいろなことを共有できたことも今の私にとって大きな財産となっております。

現在は、この経験を活かして、自分が1期生を送り出した羽水高校の探究特進科をよりよくするためにどうすればいいかを考えながら過ごしております。生徒とともに新たな道を切り開きながら進んできましたが、今思い返すと、もっといい方法があったのではないかなと思うことも多々あります。教職大学院での学びを活かし、探究特進科だけでなく羽水高校をさらに発展させていくために、自分に何ができるかを考えながら、挑戦を続けていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。



コースだより

LIFE「自分らしく生きる」～人の営み・人生の探究～

ミドルリーダー養成コース2年/新宿区立牛込第三中学校

古賀 めぐみ

連合教職大学院での学びも2年目となった。大学院では自分の疑問に対して答えを与えてくれるわけではなく、自身で課題を見つけ、異業種の先生方との対話を通して自らを振り返り、課題解決していくという、生徒の探究的な活動と同様の学び方を行っている。入学当初は「本校の先生方が自分らしく生き生きと仕事ができる環境を作るにはどうしたらよいか」というテーマだったが、過去の実践報告書や理論書を読み、院生の方々との対話的な活動を進める中で、本校でも探究的な活動を行うことで先生方も相互に学び合い、対話し合い、教師自身が対話的で協働的な教員集団が徐々に構築されていくのではないかと考えるようになった。

そこで本校生徒の課題は何か考えた。地域柄もあると思うが、素直で言われたことに従順に行動するが「あらかじめ答えを求めたがる」「個で考え、個で動くこと（自分の考えをもち、自分の行動に責任をもち）」「チームとして協働しあい高めあうこと」が課題である。その課題を解決するため「教員が成長のために時間を割くことを厭わない」「自己決定しても支援してもらえるという生徒と教師の信頼関係（生徒の心理的安全性）」「探究的な学習を通して自己決定力、課題解決力、多様な他者と協働する力の育成」が必要と考えた。

本校の総合的な学習の時間では学校行事（移動教室、修学旅行、職場体験など）の事前・事後学習の取り組みを行ってきた。現任校だけでなく、勤務してきた学校すべてが同様の内容だったように思う。タブレットが生徒一人ひとりに渡り、調べ学習も手軽に

情報を得ることができ、事前学習での新聞作成はタブレットで得た情報や写真を上手に使い構成し提出する。事後学習でも同様の方法でまとめ紙面発表で終わるか、もしくはパワーポイントを行動班で作成し発表するというパターンで実施している。この学習パターンでは「まとめる力」や「発表する力」は身につについていくかもしれないが総合的な学習の時間における「探究的な学習」とは異なる学習スタイルだと思う。そのため第1学年のキャリア教育の一環として「探究的な学習」を取り入れることを提案している。全学年で実施していきたいところではあるが、学校事情もあり第1学年での取り組みを進めることとした。1学年の先生方全員が総合的な学習の時間での探究的な学習への取り組みは初めてで、私自身も「こう進めていけば、このような成長につながる」という明確な答えを持っているわけではなく手探りの状態だが、先生方と共に対話しながら学びながら取り組もうと考えている。

テーマは“LIFE「自分らしく生きる」～人の営み・人生の探究～”である。これからの予測困難な時代を生き抜いていく子どもたちにとって、生きるということは人と関わりを持ち、「誰かのために」「社会の一員として」という思いで仕事に携わっていくことが必要になってくると思う。「自分らしく生きる」ということは身勝手に生きるということではなく、自己肯定感や自己有用感をもち、社会参画を通じて他者とのコミュニティを築き上げながら生きていくことを意味している。学年会では先生方に「教えるのではなく、生徒と共に語り合いながら探究を進めてい

きましょう」と伝えている。教師主導型の中学校教育の中で総合的な学習の時間は生徒の興味関心を共に高められる時間だと考えている。生徒同士だけでなく教員も生徒の考えにワクワクしながら一緒に考えを述べあい、時にファシリテーターとして時にジェネレーターとして伴走しながら「探究」を進めていければと思っている。もちろん、教員全員が「探究」の

素人である。だからこそ失敗を恐れず、時に起こるであろう「探究の停滞期間」も楽しみながら生徒と共に学びを深めていこうと思う。

「人間は自ら行動したいのであって、与えられたものを耐え忍びたいのではない」(幸福論 アラン著)

語り合い、変わっていく

ミドルリーダー養成コース2年/岡谷市立岡谷北部中学校

中野 晃宏

○教職大学院の心地の良い雰囲気

ミドルリーダー養成コースに入学し、2年目になった。入学当初は、自らのことを語ることに抵抗があった。どんな風に話せばいいのか。自分の話す時間が長いけれど、そんなに語ることでいいのか。周りの先生の話の話を聞いていると、考えたことを推進し、実践し、ふり返り、どんどん進めているのに、自分はそこまで何も進められていない……どうしようか。と不安ばかりが毎回押し寄せてきていたことを思い出す。しかし、同じように毎回その日の終わりには「今日来て良かったな」と感じている自分がいたことも思い出す。教職大学院での語り合いでは、どんな実践であっても耳を傾け、真剣に向き合い、私の実践についてそれぞれの視点で考えが返ってきた。同じ職場でもないそれぞれの立場の方々が、自分たちのことのように考え、それが私にとってとても心地の良いものになっていたのだと1年をふり返り、感じる事ができた。

○語り合いから気づくもの

私の勤務している学校では、「対話」を研究テーマに据え、「生徒同士が対話しながら考えを広げ、深めていくためにはどうしていけばいいのか。」を考えている。そのことについて教職大学院では、月間カンファレンスやラウンドテーブルで語り、勤務校に戻っ

ては、教職大学院で語り合ったことについて教頭先生に伝え、そこでさらに教頭先生と語り合った。ある月間カンファレンスで、「教員の問いの質を高めることで対話は自然と生まれるもの」「考えをもっている、安心できなければそもそも話すらできない」という考えは、人と語り合う上で、対話をする上で本質的な部分であり、「対話」が手段の一つではなく、目的となっていたことに気づくきっかけとなったものであった。普段勤務をしているときには、教職大学院のように語り合うことがあまりない。教職大学院で語り合うこときっかけがあったことで、知らず知らずのうちにずれていたことに視点が向けることができた。

○変わっていく立場と考え

ミドルリーダー？今の私にそんな力量が見合っているのか。教職大学院でコースを名乗る度、研修等と言われる度に不安を抱いている。しかし、今の職場で周りを見渡せば、年齢や経験年数を考えても、自分が不安を抱えている場合ではないことを実感している。また、教職大学院での語り合いで気づいた、「問いの質」や「語り合うための環境」については、私一人が実行するだけでどうなることでもない。同じ職場の先生方と力を合わせなければならないものだと思うようになった。また、教職大学院での語り合う環境の居心地のよさは今の職場の先生方にも感じて欲しい

な。と思っている。今の職場の先生方にも実感できれば、教材研究や生徒指導、学級経営などのことも語り合うことで、新しい視点や考えの深まりが生まれるのではないかな。そんな思いを抱くようになった。思いを実行するためには、先生方に発信し、全体で動けるように環境を整えて行動しなければならない。教職大学院で感じた思いは、私の立場とともに考えをも変えている。

○これから

2年目がスタートし、勤務校の「対話」は生徒だけでなく、職員同士の対話ができるようにしていきたいと思い、少しずつ進めている。正直なところこの先がどうなっていくかはわからない。でも、そんなこともこれから今の職場の先生方と語り合って、子どもたちのことを考えながら、作っていきたい。

開かれる保育に

学校改革マネジメントコース 3 年/玉ノ江こども園

荻原 慶子

教職大学院に入学して 3 年目に入ってしまった。実感としては本当に入ってしまったのである。この 2 年間問をしてきたのだらうと、悔いばかりが頭の中をグルグル回る。

私の中では、ここ 5 年間ほど「保育者同士が保育を語ることが出来る環境を作る」を玉ノ江こども園の中で主にして行ってきた。それには、お互いのクラスの保育を見合うことがセットの様についてくる。

1 年目は、クラスリーダーのみが担当のクラスを見に行った。この時はリーダーが行くことで、「自分たちの保育が評価される」感が強く、午後からの話し合いでは、「緊張した」「いつもと違う」等の声があがった。

これではだめだと 2 年目は、参加者は担任をもっている保育者（非常勤も含めて）で、自分のクラスの保育の中で、面白いと思った場面を写真に撮り、それを見せ合い感想を話す、という話し合いの場を持った。1 グループ 5 人までとした。1 回の話し合いでは、一人が持ってきた写真からクラスのこども達の姿を伝え、それに対して他の保育者が感じたことを話すというものにした。これも 1 人目、2 人目くらいまでは良かったのだが、3 人目（3 回目）以降になると、聞き手は実際の場面を見ていないからか、話を聞いて

からの感想が、いつも同じになってしまう。という意見も出た。これは、話し手が写真の場面のみの話をしていただけだろう。そうではなく、「なぜ、その場面を切り取ったのか。何が面白いと思ったのか」などと、写真を撮った保育者の心情をもっと聞くべきだったと反省する。そうすることで、様々な保育者の保育観が見えたのではないのだろうか。

3 年目は、「保育を各部屋に見に行くことは、忙しくて無理」と諦めていたのだが、10 分でも 15 分でもいいから、空いている時間に保育を見て、話し合ったらどうだろうかというアドバイスを頂き、行なってみた。が、やはり保育者はこども達と生活していることで、空いている時間が自分ではなかなか作れず、話し合い当日に、話すために滑り込みの様に保育を見て、15 分経ったら自分のクラスに戻るとなってしまった。子どもたちのあそびの姿を追うという事や、環境や保育者の関わりをじっくり見るという事は出来なかった。

ただ、3 年間出来なかったことばかりではなく、とにかく保育について自分はどのように思ったのか語り、他の保育者はどのような見方をしていたのかを聴きあうという場が積みあがってきたように思う。

4年目は、主幹保育教諭から「もっとじっくり保育を見ていかないと意味が無いように思う。見あいつこの回数は減るがそうさせてほしい。」と意見があり、1時間30分程、保育を見る時間を設定した。話し合いは出来ているのだが、その内容は「～ちゃん、こんな姿があったよ」とか「〇〇の保育者の関わりが良かった」というプラスのことのみの話で終わってしまい、「今の保育をもっとより良いものにしていくにはどうしたらいいのだろうか」というような突っ込んだ話にまで広がっていかなかった。これは、玉ノ江こども園の職員は質問をする事で、相手の保育を否定してしまうのではないか、という思いを持っているように感じる。そのため、最後の見あいつこ保育では、宮本先生とも相談をして、カンファレンスでは参加者の話を聞いた後に、午前中の保育の一部分を切り取り、「この保育の場面がより発展していくにはどうしたらいいか」という問いを出してみた。この問いに関しては、「よりよく」というものだったからか、否定された感はなく積極的な話し合いが各グループで行われた。

この体験をもとにして、令和7年度は担当クラスの保育者から「どこを見てほしいのか」「それはどうしてなのか」という問いを出してもらった。2回の見あいつこ保育を終えて、担任からの問いが出てきたことで、昨年度までは担任は、参加者の意見を聞くという受け身的であったように思えたが、今年度は担任が主の見あいつこ保育に近づいているような気がする。しかし、この2回共に担任から「現在の子どもの姿・どのような保育をしようと思っているのか。その中で悩んでいること」等をきちんと伝える場がなかった。問いの背景となるものが伝わっていなかったように思える。

令和7年度の見あいつこ保育や公開保育は始まったばかりなのだが、担当の保育者から問いを発していく事で、受け身ではなく積極的に意見をもらい、それを保育に活かしていく。そのような見あいつこ保育や公開保育につながればと思っている。

実践コミュニティへ

学校改革マネジメントコース3年/同志社中学校

田畑 彰子

3年目が始まった。自分の中の教員観、授業観、学校観。観が揺さぶられ続けている。

本校の校内研修はというと、昨年度に引き続き、「生徒たちだけでなく私たち教員も探究していく」を柱に、4、5人のグループでお互いの授業をみとりあい、各グループで1つのテーマを決めてそれぞれが授業をつくることに取り組んでいる。3回目の今年度は、初回の研修に木村先生をお招きして、昨年度の振り返りを、ポスターセッションの形で行った。それから、新しいチームでテーマ決めを行った。どのグループも活発な議論がなされた。月に一度の

時間確保を行いながら、それぞれの授業にむけて進めている。

また、お互いの授業をみとるために教職大学院の先生に来ていただき、勉強会を学期ごとに開いている。6月にも小林先生、向当先生に來校していただいた。

さらに、先日、昨年に引き続き、福井大学附属義務教育学校で一日研修を行うこともできた。牧田先生から「これからの学校に求められているもの」と題して「正解」を探す(求める)教師から「自分なりの回答」を創り出し語ることでできる教師で、さ

らに「問い」を持つことができる教師が求められること、子どもも教師も「探究し協創するコミュニティ」の必要性が語られた。

異なる教科・学年の教員で構成された授業研究会では、それぞれの教員が自分の問いを持ち、子どもの姿をもとに語り合い、聴き合いながら、さらに深め、問い直しているのが印象的だった。これが、対話だと感じられたのは、共に学び、問いを通じて学校づくりという本質につながっているものが見られた。

数学の授業は、最短距離を求めるという問いから始まり、生徒たちは自分の思うままに線をかいていく。何本も線を引いている。早々にできていた子も、友達の「私はこうしたよ」という言葉に、線分の長さを実際に数本測り始めた。クラスで全体共有をし

ても「どれが一番いいかな？」とさらに問われることで、生徒たちの検証は加速していく。教室のあちこちとで、ああだ、こうだと時間を気にすることなく、熱中しているものだった。「正解」ではなく、「考えるプロセス」を大事にしている授業で、こういう授業を自分もしていきたいと改めて思った。

生徒のつぶやきから「問い」がうまれる。その問いをデザインして「材」にしていく。その授業で、子どもたちがさらに問いを見つけてくる。

一日を通じて、自分の浅さを痛感させられた。さらに、ともに学びあうコミュニティにしていきたい。牧田先生の言葉にあったように、急がば回れ。焦らず、自分自身を見つめなおし、ひとつずつ取り組んでいきたい。たくさんの気づきをいただいたことに感謝しながら、暑い夏、じっくり省察していきたい。

自分事(当事者意識)になるために

学校改革マネジメント3年/社中央第一こども園

山田 晶子

長期履修をさせて頂いているので、今年度3年生の私。しかし、3年と言っても実際には、あつという間に時間が過ぎ去っていくので、本当に組織に力が付いてきているのか？ずっと日々悩み中でもある。話し合いをしても、自分の役割・担当や、自分に興味関心がないと「他人事」になってしまっている。どうすれば自分事になるのか？それは、ずっと私の課題でもある。

二年目に、園の組織が少しずつ変わってきた。光が見えてきて喜んだのも束の間、自分事にならなかった職員が、上手く子どもの遊びを掴んだ職員にストップをかけてしまった。「やりたいことが出来ない」と悲愴な様子。

職場で自己発揮できる環境を作るのは、教頭としての私の役目。どうすればこの職員が、「楽しい！と思い、自己発揮」が出来るのか？若手職員は、相談相

手が近くにいると安心して仕事ができる。でも自信がないと手を出さない。背中を押すような先輩がいると頑張ることが出来る。などなど聞き取りをして令和7年度のクラス担任を考えた。

結果的に、3.4.5歳児に若手の職員を、0.1.2歳児にベテランの職員を配置した。3.4.5歳児担任には、「子どもの声を聞いてやりたいことを思い切り挑戦して！」と言い、0.1.2歳児担任には、「幼児教育の土台の大事な時期。丁寧な保育を実践して！」と、それぞれにお願いした。若手職員には、頼りない部分もあるので、非常勤の職員に若手職員を支えてもらうことにした。

4月からもうすぐ3か月。若手職員の中から面白い遊びが出来ている。「お茶研究！！」と言っている。モンテッソーリ教育のお仕事という時間から、「茶道」を子どもに紹介した。それが、子どもにヒットしたよ

うで「お茶は何からできているの?」「私たちにも育てることが出来る?」「やってみたい」と、実際に「ヤブキタ」というお茶の木を買って植えた。木に名前も付けてせっせと水やりをしてお世話をしている。他にも子どもと一緒にいろいろなことに挑戦している。私がインスタグラムを見て、若手職員に「越前市の味真野でお茶摘みボランティアだって」と伝えると若手職員は、「行きたい!」と即答。せっせとお茶摘みをした。味真野茶保存会の方に「お茶揉みに挑戦すればいい」とお茶揉み方法を聞いて、お茶の葉を頂いて子どもたちとお茶揉みをした。それを味真野茶保存会の方に飲んでもらった。全く知らない世界を楽しんで経験している。若手職員には、スピード感がある。子どもの声を聞いて動いているので、時には担任が意図しない全く思わないことにもいって追いかけるのが大変。でも、それが面白い。子どもも職員もそして私も…

「これが自分事なのか?」と気付かされワクワクドキドキしている。多分「知らないこと」が良かったのかも…知っていたらついつい教えたいとか、違ふよと要らないお手伝いをしてしまう。知らないからこそ「どうしてかなあ?」「先生もわからんわ」「え〜大人なのに?」と子どもと話をしているととても楽しそう。

周りの職員も、子どもと楽しそう!なやり取りを見守っている。この姿を見て、自分もやってみようと思っていたら嬉しい。今までの私だったら、「〇〇組面白そう!他のクラスも挑戦してみて」と言っているのだろう。(この一言がやる気をなくしてしまうらしい。)促さずとも自分で考えて、自分も面白がって自分事が出来てくるといいなあ。

今回組織の配置を考えて、期待を上回る成果が出ている。若手職員のやりたいことが思い切りできる喜びを感じつつ、もっともっと伴走していきたい。



インターンシップ/金曜カンファレンス報告

「全員参加の授業」を目指して

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

青山 莉子

今年度は附属の前期課程でインターン講師としてお世話になっている。昨年度は授業に追われる毎日だったため、今年度は自分の中で目標を立ててインターンを行うことにした。そこで立てた目標は「全員参加の授業」である。

私が全員参加の授業を目指すことになったきっかけは、昨年度の附属後期課程での経験からである。

昨年度私は、大学院や附属でよく聞く、授業における課題、問いをどのようにつくるのか、単元を貫く問いとは何か、単元後の子ども達の目指す姿とは何かなどに悩んでいた。そんな中、冬期集中講座で今までの授業における生徒の様子などを思い出しながら1年間を振り返っていた。すると、どの授業においても全員の生徒が参加しているということは

ほとんどないことに気付いてしまった。そもそも全員が参加していない授業で、子どもたちの学びを保証することができるのか、「単元を貫く問い」「単元後の目指す子どもの姿」などを考える以前にまずは全員が参加できる授業を目指すほうが先なのではないかと思い、この日から「全員が参加できる授業とは何か」が私の中で大きな課題となった。

8年生最後の電気単元で、まず私は子ども達の声を知りたいと思い、子どもたちと一緒に授業を考えていくことにした。できるだけ生徒の思いを組み込み、生徒の思考に沿った授業を行いたいと思い、(明確に名前を付けたわけではないが)“一緒に授業をつくろう会”のような、何か言いたいことがある生徒がふらっと立ち寄って話ができるような集まりを作ってみた。固定メンバーは4、5人おり、そのほか5、6人が入ったり出たりと、出入りが多く、時にはまったく授業に意欲的ではないように見えていた生徒がふらっと来て「僕、みんなの意見を聞きたいです」と言ってくれることもあった。生徒から話を聞くことで、私が見落としていた生徒のつまづきや子どもたちにとっての自然な思考の流れが見えてくるような感じがして、私の理想である「全員参加の授業」に少しずつ近づいているように感じていた。しかし1つだけ悩みがあった。それは、“一緒に授業をつくろう会”から一番遠い女子生徒集団がなかなか授業に向いてくれないことであった。

その悩みを金曜カンファレンスで話してみた。院生から様々な言葉をもらったところで、最後に教職大学院の先生は「メンバーでない周りの女の子たちの気持ちは考えたことはあるか。このまま実行委員制を続けていくとメンバーとそうでない子の授業に対する意識の差がさらに開いてしまう。」というお話をしてくださった。なんとなくうまくいっていると感じていた私は、この先生の言葉にはっとさせられた。私は自然と集まってきてくれる生徒の声だけを聞いて、あたかもそこにクラス全員の思いが入っていると思い込んでしまっていたことに気付いた。一部の生徒の意見を聞いていただけで、まったく「“全員”参加の授業」には近づいていなかった。

この経験から本当の意味での「“全員”参加の授業とは何か」を考え、いつか「全員参加の授業」を実現したいと思うようになり、今年度の私の大きな目標となった。

そして前期課程に来て約2か月、「全員参加の授業」を目指して授業を行っているが、やはりなかなか難しい。子ども達が興味をもつハードルは中学生に比べて低いものの、その場限りの興味で終わってしまい、興味が持続しない。悩み続けている毎日だが、今年度の5月月間カンファレンスで「全員参加の授業」のイメージが広がった。

月間カンファレンスでは「全員参加の授業」を目指していること、最近周囲の児童と関わりがないように見える静かな児童はどのような学びをしているのか気になり、その児童の見取りを行っていることとお話した。その児童は直接他の児童と話したり行動したりすることはないが、他の児童の「トリだ!」という声に反応してその鳥を追いかけ、調べたり、アリの巣に植物の茎を刺している児童の様子を見て、アリからアリの巣にも興味を持つようになったりと周囲の影響を受けていることが分かった。そんな話をしていると、同じグループの先生から「きっと青山さんはその児童のような関わり方も認められるような授業を目指したいと思っているんじゃないのかな」と言われ、その児童のように直接他の児童とは関わることはなくても、他から影響を受け、他に影響を与える、活かし活かされ合うような授業を私は作りたいんだ、そんな形での授業への参加も認められる授業を作りたいと考えるようになった。

現在は様々な形での参加が受け入れられ、活かされるような「全員参加の授業」を目指している。昨年度終わりから私の中での「全員参加」のイメージが膨らんでいっている気がする。こう振り返っていると、私が「全員参加の授業」を考え直すきっかけとなっているのは様々なカンファレンスで語り合うときである。今後も自分の経験を言語化する場を大切に、私なりの「全員参加の授業」を実現させていきたい。

悩みが多くなった二年目

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

島田 涼真

M2となり、長期インターンシップのメンバーもカンファレンスの顔ぶれも新たになった。自分たちが引っ張っていかねばならない立場となり、金曜カンファレンスについて見る部分が変わったように思う。今まではただ先輩方が提案した活動や課題を行い、学びを感じ取るのみであった。しかし今や自分たちの活動を評価してもらう側になり、学びの流れを意識せざるを得なくなる。なぜ、それをするのか。動機はどこにあるのか。自ら学ぼうとする導線や興味はどう設定するか。何を学べるのか。これらは授業づくりにも通じることだ。運営側に回ったことによる恩恵は、「学びを作り出すこと」を学べるところにあると思う。だが迷いもまたあった。現在の金曜カンファレンスの内容は、いくつかの班に分かれ考案されているが、まさに自分たちの班が行うべき学びとその導線をずっと迷っている。その突破口がまだ見えない。だが今まで、個人で案が出なければグループで助け合い、グループで迷えば全体で助け合ってきた。M2の仲間たちは、まるで学校における同僚だ。学校で研究会を開き、先生方が助け合うように、ともに助け合いカンファレンスに臨んでいきたい。

M2になり、あまり変化がない自分とは正反対に、福井大学附属義務教育学校の子供たちの成長には目をみはるばかりである。そして同時に、自分が子どもたちを見ない6日間(M2になってからインターンシップが一週間に一回になったのである)がとてももったいなく感じるようになった。インターンシップで学校に赴くたびに、私は子どもたちの新しい顔に出会う。だがその過程には出会えない。省察をするしかそこに近づく方法がない。他にも自分が講師でないことで、教卓の前に立つからこそわかる児童の顔も見えていない。インターンシップ生の立

場はなんてわからないことばかりだと感じ入る。だからこそ一日の子どもとのかかわりが重要なのだ。最近先輩の長期実践を読み、話しかけていなかった子どもの見とりの重要性を知り、見とりのやり方を変えた。見とりは授業それぞれで子ども一人を見ていくだけでなく、一日全体で全員のことを些細なことでもいいので記すことにした。そこでわかってくるのは、子どもたちの人となりだ。授業の中だけでは見えてこない背景である。例えばいつも授業でふざけている子が、授業の外では社会(それも歴史)が好きで、特に戦国時代と近代についてよく話せると判明したこともあった。その子は三年生の総合的な学習の時間(附属義務教育学校では社会創生プロジェクトだが)で自分たちの地域を知ったときに、歴史的な建築物に一瞬だが興味を示したことがあった。その一瞬のアクションは、もし私がその子と授業外で関わり、関係を深めていなければ、見逃していたことだろう。授業外での児童、友達との関わり、趣味嗜好など、授業での彼らは一側面の発露に過ぎず、その一面は様々なかかわりにつながりによって構築されている。そこによりやく実感として持てたことは自分なりの成長だろう。

M2となって悩むことが多くなった。しかしそれは、自分なりに児童や教育についてぶつかっているからなのだろう。これから先、何度も疑問に悩まされるだろうが、きっと答えは同僚であったり、先輩が残してくれた記録であったり、あるいは先輩である現職の先生方が持っているはずだ。金曜カンファレンス、そして長期インターンシップは、その機会を私にくれる。カンファレンスは4時間、長期インターンシップは一日と、一週間で短い時間しかないが、その時間を活かすためにも常に記録を忘れず励んでいきたいものだ。

大学院で何を学ぶのか

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

高木 雄也

私は現在、教職大学院に通いながら、福井大学附属義務教育学校でインターン兼非常勤講師をさせていただいている。今年度は前期課程から後期課程へと移動した。

日々のインターンの中で、私は何を学んでいるのだろうか。非常勤講師もしているため、授業をしている中で、ここがダメだった、もう少しこうしていれば、次回からこうしようなどと省察を行い、次の授業に活かすということは常に行っている。しかし、この省察的な実践者としての学びは非常勤講師としての学びであり、インターンとしての学びではないように感じる。もちろん非常勤講師での学びも含めてインターンの学びではあると思うが、もし私が非常勤講師でなければどうなっていたらだろうか。

インターン生のやることは、先生の手伝いや子供と関わること、授業を見ること、授業を実践すること、先生やインターン生と語り合うことであると考ええる。何も考えずにインターン生として学校にいただけでは、子供と関わるスキルや授業のネタなどを身に付けることはできるかもしれないが、見とりの質や授業の質、教師としての資質・能力は高まっていけないのではないかと。おそらく私が非常勤講師をしていなかったら、授業を見て、子供と一緒に学校生活を過ごすだけで、そこまで学びの深いインターンにはならなかったのではないかなと思う。

では、インターン生はどのように学んでいくのか。インターン生の特徴として、時間があることが挙げられる。緩やかな時間の中でインターン生は日々の学校生活の意味や見とりの意味、授業の意味や捉え、自分の教師として大事にしたいものなどを考えていくことで学びを深めていくのだと思う。そのきっかけが週間カンファレンス（金カン）であり、インターン生同士の語り合いであり、メンターとの語り

合いなのだろう。自分の日々の気づきや学びを他の人と語り合うことで自分の中に新たな気づきが生まれ、そのものの大元に立ち返る機会になると思う。私自身昨年度はメンターの先生との話し合いの中で、学びとは何なのか、見とりとは何かなどを考えるようになった。

最近聞いた話によると、省察には種類があるらしい。「リフレクション・イン・アクション」（行為のなかの省察）と「リフレクション・オン・アクション」（行為についての省察）である。（他にもあるが省略）「リフレクション・イン・アクション」（行為のなかの省察）とは、授業中に子供の様子や状況に応じて何か物事を判断して指示を出したり、授業後に子供の授業の様子やワークシートなどを基に、この授業でこの子は何を学んでいたのか、この子の行動にはどのような意味があったのかなどを考えたり、子供の現状を踏まえてこれからの授業をどうしていくかを考えたりすることである。つまり、実際に起きた行為（授業）がどうだったかを省察するということである。「リフレクション・オン・アクション」（行為についての省察）とは、そもそも学びとは何なのか、子供はどのように学ぶのか、授業とはどうあるべきなのかなど、実際に起きている行為ではなく、一般化した行為を省察するということである。

この話を聞いたとき、私はふと大学院のことを思い返した。大学院のカリキュラムである金曜カンファレンスや月間カンファレンスでは「リフレクション・イン・アクション」と「リフレクション・オン・アクション」を同時に行っているのではないかなと思った。日々の実践や学びを語り、語る中でその行為自体を省察すると同時に、そもそもその行為にはどのような意味があるのかと考えるような機会がとても多かったように感じた。

私たちはこの大学院で、省察し実践するコミュニティを目指している。日々の実践を省察し、時にはその行為について“そもそも”を省察すること、そ

してそれを語りあうということをこれからも行っていきたい。

充実

授業研究・教職専門性開発コース2年/羽島市立中央小学校

府川 優美

大学院の生活も2年目になり、昨年度からの学びの積み重なりと新たな環境での学び、自分の考えが整理されていく感覚を感じている。

昨年度は、岐阜聖徳学園大学附属小学校でインターンをさせてもらっていたのだが、今年度から公立の中央小学校でインターンをさせていただいている。中央小学校は、私が教育実習のときにお世話になった小学校で、メンターの先生も教科担任として指導してくださった先生である。しかし、教育実習のときとは私の立場や考えが変わり、インター先の学校が変わると一年間過ごしてきた場所とは先生方、子どもの雰囲気も変わる。私は、お世話になった場所とはいえこの場所でどう関わっていけばよいのか、難しさを感じていた。現在は、なんとなく子どもとの接し方がわかってきて、そして子どもたちも私に慣れてくれただろう様子であり、学習支援に入ったり、音楽科の授業実践を行ったりしながら学校生活を共にしている。

音楽科の授業実践については、事前にメンターの先生と単元の流れを確認し、クラス数が多いという利点があるため何度も修正を重ねながら授業づくりをしている。何が子どもたちの学びになるのか、どんな活動が子どもの感性を引き出すことができるのか、先生と相談し考えながら実践ができているため、とても充実した時間が過ごせている。

私が特に大切にしていることは、子どもへの言葉の選び方である。子どもたちは一つ一つの言葉に敏感で、先生が発した一言で喜んでいる表情を見せ、

よりやる気につながっている様子を見かける。逆も然りで、先生のちょっとした一言で不満を抱えている様子や落ち込むような表情を見せることもある。多様な子どもがいる中で、いくつかのクラスを見ているとやはり子どもたちの関係性や特徴で学級の雰囲気、授業の雰囲気が違う。大学院生活で私は、単に授業の導入、内容構成が子どもの意欲につながるのではなく、雰囲気づくり、つまり学級経営も子どもの学びの質に影響を与えると実感した。先生の言葉の選び方が、子ども同士の言葉遣いにも影響を与えている。私は院生という担任ではない立場をよい意味で利用し、できるだけポジティブな言葉を使ったり、子どもの表情をよく見て声をかけるタイミング、言葉を選んで話をしている。よく「しまった」と思うことや迷うことが多いが、その感情も含めて大切な経験になっている。

岐阜拠点では、金曜カンファレンス（以下金カン）ではなく、木曜カンファレンス（木カン）が行われている。木カンでは、ふり返りの時間に1週間のインターンで考えたことや問題についてレポートにまとめ、そのレポートをもとに一人ずつ発表するというかたちが取られている。昨年度まではこのレポートをどうまとめればよいのかわからず苦戦した。最近になって、「自分がなぜその行動を取ったのか、自分はそのとき何を考えていたのか」「その出来事に対する教育課題は何なのか」など、経験をふり返りレポートとして文章に書き起こすことで、自分が子どもと接したり授業実践をするにおいて何を重視しているのかが捉えられるようになってきた。

また、木カンでは基本的には M2 がマネジメントしていくが、岐阜拠点では特に M2 が何か運営することではなく、先生方が私たちに足りないものを補えるようなものを提示してくださる。このかたちが良いのかどうかはわからないが、結果的には自分の力にはなっているのだろうと日々実感している。

岐阜拠点の院生は月間カンファレンスの日程に合わせて金カンに月一ほど参加させていただいている。木カンは人数が少なくいつも固定メンバーなのに対して、金カンは毎回違う院生の皆さんと話を

したり意見を交わすことができる。岐阜で行っていることとのギャップがあるが、たくさんの人と話をすることが純粋に楽しく、自分にはない考えや価値観に触れると面白いな、と思える。

インターンもカンファレンスも、いましか学ぶことができない貴重な時間、経験である。そして、どの時間にも人との関わりがある。関わっていただいている方々との時間を大切にして、限りある院生生活を充実したものにしていきたい。

今の私にとっての金カン

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井県立高志高等学校

川嶋 海音

大学院に進学してから、気づけばもう 3 年目を迎えた。一般的には 2 年間で修了するため、3 年目に在籍している私は、いわば少数派に属する存在だ。この立場だからこそ見えてくる景色や、感じられることがある。

たとえば、毎年恒例の金曜カンファレンス（金カン）では、これまで運営側としていた私も、今年は一歩退いた立場になった。その結果、M2 の後輩たちが主体となって準備や進行を進める様子を、少し離れたところから俯瞰的に見るできるようになった。自分たちが運営を担っていた昨年と比べて、今年の進め方にはどのような違いがあるのか、または変わらない本質的な部分は何なのか、そうしたことを冷静に観察し、考察する機会にもなっている。

こうした立ち位置の変化は、3 年目だからこそ得られるものであり、今だからこそ味わえる時間だと感じる。忙しさに追われる日々から少し解放された今、自分のこれまでを振り返り、これから何をすべきなのかをゆっくりと見直すことができている。授

業やインターンに追われていた頃とは違い、時間に余裕がある今の私は、逆に「自分に何ができるのか」「何をすべきなのか」といった根源的な問いに向き合うようになった。そんな問いを投げかけてくれるのが、今の私にとっての金カンという場でもある。

また、毎回のディスカッションのなかで、自分とは異なる意見や価値観に出会うことも多い。グループのメンバーとの間で意見が食い違うこともあるが、そうしたときに、自分の考えを率直に伝えることができる雰囲気があり、同時に、相手の意見にもきちんと耳を傾ける姿勢が育まれているのを感じる。そのような対話が可能な環境が存在していること、そしてそれを皆で築いてきたことに、私はとても価値を感じている。

意見の違いを恐れず、互いを尊重し合う姿勢を持ち続けること。それは一見当たり前のようでいて、実は最も難しく、そして最も大切なことなのではないだろうか。3 年目という今の私だからこそ、こうした気づきや実感が得られているのだと思う。



月間合同カンファレンス（5月）報告

環境づくりの大切さ

授業研究・教職専門性開発コース2年/岐阜市立柳津小学校

都筑 智也

今回の5月カンファレンスでは、それぞれの学校で動き始めた状況についてグループで語り合いながら、そこでの協働研究などを踏まえて、これからの展望をひらく活動を行った。

まず始めに、小浜中学校の泉浩先生による実践報告がされた。その報告では、今自分が活動している学校だけでなく、これから活動していくことになる学校でも意識していくべきことが語られていた。その内容は「コミュニティの居場所づくり」である。この内容について考えることで、様々な人にとって安心感や有用感を感じることができるようなコミュニティをつくっていかうとする意識を持つことが大切であるということを学ぶことができた。たしかに、個々の能力が高くても、それを発揮することができる環境が無ければ意味がない。そして、それは子どもたちだけでなく、教師にとっても深くかかわってくるものである。つまり、様々な立場において安心して実力を発揮できる環境をつくるのが大切である。例えば教師については、校内研修でカンファレンスを取り入れ、かたい雰囲気の中でただ学ぶのではなく、自分の考えを年齢やキャリアに関係なく語り合える環境をつくるのが大切である。子どもたちについては、朝や帰りに子ども同士でコミュニケーションをとる時間を用意し、他人の考えを尊重する意識を日常から培っていったり、縦割り活動などで、それぞれが役割をもち、自己有用感や達成感を感じることができるようにしたりすることが大切である。また、子どもの良い姿を教師がす

ぐに価値づけすることも重要である。それぞれの立場においてよい環境をつくるためには、日常生活の中で常に他人とどのように関わるかを考え続けることが大切だとわかった。

その後のグループの語り合いでは、実践報告を基に、現在自分が属しているコミュニティについて話し合ったり、その中の改善点について考えたりした。その中で、特に気になった内容についてまとめていきたい。まずは、安心できる環境というのは、互いに頼ったり頼られたりすることができる環境なのではないかという考えである。この話を聞いて、信頼関係を築くことが安心感のある良い環境をつくる上で必要不可欠なことであると私は感じた。次に、教師が子どもたちに指導をする際、教師全員が同じ指導を徹底しないといけないのではないかという考えである。教師によって言っていることが変われば、どの言葉を信じたらよいのかわからなくなり、安心できる環境だとつくれない。これも、信頼関係に関わることであり、指導をする上で注意しなければならぬことだと知ることができた。

今回のカンファレンスでは、学校での居場所づくりについての語り合いを行った。学校の中で安心感を感じたり、自己有用感を感じることができる環境をつくることは、これからの学校現場においてとても大切なことであると考えられる。理想的な環境をつくるためには様々な課題があるが、子どもたちだけでなく、教師にとっても安心感のある環境をつくるためには、常に他人とどのように関わってい

くべきなのかを考えることが必要であることがわかった。今回学んだことをこれからの活動の中で意識し続けられるようにしたい。

当たり前を自分の中で認識し・問い直す先にあるもの

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属特別支援学校

前川 真慶

新年度が始まり、2 か月が経った。私は、昨年度からインターン校を変えなかったこともあり、大きな環境変化というものはなかった。しかし、昨年度は、免プロ生として週 1 回半日のインターンであったが、今年度は週 3 回 1 日インターンという形に変更になった。さらに、児童・生徒との関わり方、自分の立ち位置、インターン校の先生方との関わり方など、場所の変化による大変さはなかったが、今までよりも現場の先生との関わりや児童に関する多量な情報を知り関わる必要があり、それに伴う大変さがあった。しかし、私にとって、この大変さは、非常に心地よく楽しいものであった。それは、昨年度、インターンに行ける回数が少なく、自分の中で不完全燃焼であったからである。その中で、今年は、ほぼ毎日児童と関わることができ、学ぶことが多いインターンに取り組むことができている。この忙しく大変な日常が非常に楽しく、毎日が充実している。その中で、今年度 2 回目の月間カンファレンスが行われた。5 月の月間カンファレンスのテーマは、「学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望をひらく」であり、私はこの月間カンファレンスから昔の自分と今の自分を見比べつつ、インターンでの経験を踏まえて、自分が今後意識しなければならないことを考えた。

私が月間カンファレンスの中で学んだことは、当たり前だと自分が考えていたことを実践できているのかということだ。月間カンファレンスは、小浜市立小浜中学校の泉浩先生の語りから始まった。語りの中には、人としての居場所作り、立場としての

居場所作りということを行う中で、学校での教員同士のちょっとした会話が人間関係では大切であるとお話していただいた。私は、この話を聞いて、自分のインターンでの経験を振り返っても、職員室内で児童に関するちょっとした会話をを行うことで、現場の先生方と色々なコミュニケーションをとることができ、信頼関係を築けていっていた。そのため、この泉先生の話を聞いて、当たり前であるが重要な話であると感じていた。しかし、私は、お話を聞く中で、この【当たり前】という言葉が、頭の中で引っかかった。頭の中で引っかかった理由は、自分が今まで考えていた当たり前を今の自分は本当に実践できているのだろうかと考えたからである。結論から述べると、私は昨年度まで考えていた【当たり前】の行動ができていなかったことに気づいた。

具体的には、昨年度の色々な学びの中で、私が児童と関わる時には、児童の悪い部分ではなく、良い部分を見つけて関わり、児童との信頼関係や学びを積み重ねていくとしていた。そのため、日常の中で、児童の良い点を探すことを当たり前にしていて、今年度も当初はこの当たり前の意識はできていたと思う。しかしながら、現状インターンを振り返ると、自分の中では、当たり前ができると考えていた児童の良い部分を見ることが、たった 1, 2 か月でその見る視点が薄まっていた。このことから、教師としてインターンに取り組む中で、自分の中で持っていた当たり前は、本当の意味で自分の中では落とし込めていないと気づいた時、自分の中で妙な切迫感に襲われた。これは、自分にとって簡単にできると考

えていた【当たり前】ができていないと気づいたからである。自分の中で持っている当たり前は、将来教師を目指すものとして、特に大事になってくるものばかりであるため、「当たり前だから」とせず、その当たり前を自分や環境に適するように柔軟に改善していきたいと考えた。

最後に、今回の月間カンファレンスでは、「当たり前を当たり前としすぎずに、絶えず自分自身で確認し、振り返っていくことで、自分の当たり前が本当の意味での当たり前に変化する」と気づくことができた。しかし、この当たり前は、無意識で忘れて

いる、確認できていないという場面がある。そのため、【当たり前も簡単ではない】という意識の基、当たり前が本当に当たり前に行動としてできているのか、また当たり前が適切な内容であるのか、自分自身で問い直し・確認することで今後の児童との関わり方や教師としての力量向上につながっていくと考えた。他にも、今回の月間カンファレンスでは、多くの気づきがあった。それら全て記載することはできないため、心に残った学びを軸に今後のインターンや教師としての力量の向上につなげていきたい。

環境とは自分を変えること

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

桑原 里沙

新たに動き出した状況といっても、附属前期でのインターンシップは3年目になる。しかし、今年度からは非常勤講師としても附属前期でお世話になるようになった。インターンのみから非常勤講師も加わったことによって、1番の変化は1年間を通じた授業を自分が行うことである。インターンと非常勤では、やはり仕事量も責任感も違う。それに伴って、インターン配属学級だけでなく、授業を受け持つ学級の1年間の成長及び変容をも追っていくことができる。

さて変化したことはそれだけだろうか。複数のクラスの授業を受け持つことによって、多くの児童と深く関わる機会ができた。インターンとしてはなかなか見ることでできなかった子どもの教科に対する思いや姿勢、実際に授業者の立場から見取ることができるようになった。授業のことは子どもだけではない。担任ではないため、授業を受け持っているクラスの担任や同じ学年の教科担任とも話すようになった。話すにしても、そもそも子どものことを一番に考えている学校であることから、私が授業や子どもの話をすると、一緒になって語ってくれる先

生ばかりである。インターンとして見取っていた頃よりも授業者の立場も増えたことによって語る話題が増えている。また、5年生の社会では、私が提案したことを「それいいじゃん、やってみよう。」と学年で合同の時間をつくったり、私が作成したワークシートに「作ってくれてありがとう。これ使いましょう。」と使用してくださったりと私も教員の一人としてくれている。ただ、非常勤講師をしていながらも、インターン生としても学級に配属させていただいているため、今まで以上によく子どもを見取り、担任とともに学級をつくっていけるように心がけたい。

さて、今の教育には何が求められているだろうか。学力調査や大学共通テストなどの試験問題から語り合う時間があつた。私が資料を読んで一番に思ったことは、私が受けた試験とあまり変わらないということである。マーク式であり知識を問うものが多いという印象を受けた。しかしそれをグループで話したところ、「たしかにそのような印象を受けるが、実際には問題の中に実際に受験者が考えているかのようなストーリー立てになっている」と言わ

れた。私が受験をした時もストーリー立てのものも少しはあったが、これほど自分も問題の中で考えているようなことはなかった。これは、少しでも思考力を試験の中で湧き出たせようとしているのではないか。これによって教員はどうすると良いのか。思考力・判断力・表現力が試験でも発揮するためには普段の授業からそれらをしていく必要がある。

さてこのような思考力が私の授業の中で身に付くようなものになっているのか。これは非常勤講師になる前から悩んでいたことである。実際に1年間を通してやるようになってからは子ども達がどの授業だと考えようとしているのか何となくは分かってくるようにはなった。しかし、それが本当に思考力が見付いているのか分かっていない。これからは、何かを表現してみることを通して、子どもの思考力を見取ってみようと思う。

5月月間カンファレンスの振り返り

ミドルリーダー養成コース2年/福井県立若狭高等学校

小畑 有海

4月に新年度が始まり慌ただしく日々が過ぎていく。私自身、校務分掌と担当学年が変わり、そしてほとんど異動がない若狭高校海洋科学科での複数の退職・異動と人の入れ替えもあり、変化の多い年度初めであった。5月に入り少し落ち着き(?)次の実践に向けて動き出す最中の5月月間カンファレンスであった。いつも通りの異校種の先生方とのクロスセッションで互いの近況を報告し合うと、今年度から管理職になられた先生、インターンシップ先が福井大学附属義務教育学校後期課程から附属前期課程になられた先生、新しく教職大学院に入学された先生など、皆さんそれぞれの変化の中で頑張られていることが分かった。このタイミングのカンファレンスで先生方とお話することによって、私自身非常に励まされた。

5月月間合同カンファレンスは、福井市松本小学校の小林千恵美先生の実践報告から始まり、後半の話題提供では木村先生から「新時代を生きる子どもたちの主体的な学びと育ちの評価」、遠藤先生から「求められる学習と変わる試験問題」についてお話しがあり、どれも考えさせられる内容であった。その中でも今回のカンファレンスで最も印象に残っているのは午後のクロスセッションだ。今回同じグ

ループでお話しさせていただいたのは、高木先生(福井大学附属義務教育学校後期課程)、八木先生(北陸高校)、高阪先生(福井大学)であった。高木先生のお話の中で、ストレートマスターの学生さんたちが実施している金曜カンファレンスにて「資質能力とは？」をテーマに皆さんで考えられたと言われていた。学生さんと遠藤先生と一緒に話をされた中では、「資質能力という考え方がまだしっかり明確に決まっているわけではない」「その子個人に身につくものなのか、その瞬間に発揮されることだからその集団にあるものなのか」「ポテンシャルとして持っていても、パフォーマンスとして発揮されないこともある」といった意見が出たらしい。この話をお聞きし、最近あった出来事を思い出した。先日、とある民間企業の留学プログラムに私の担任する2年生クラスの生徒5名が申込を希望した。プログラムに参加するためには選考があり、申込時に1200字程度のエッセイと、800字程度の自己紹介・自己アピール文の提出が求められた。そしてその文章を元に面接があり、合否が決定する流れであった。5名の生徒は短期間でそれぞれ自分なりに文章を仕上げ、私が添削を担当した。その中のAさんの自己アピール文には「私の長所はコミュニケーション

能力だと考えます。」と書かれており、コミュニケーション能力を培った経験や自身の能力をどのように留学で生かしたいかが述べられていた。私が入学時から見てきたAさんは、元々口数が少なく、あまり周囲を巻き込むことなく黙々と物事に取り組む生徒であった。しかし探究活動の中で仲間や地域との協働を通して自分からどんどん話すようになっていった。そして今では留学にチャレンジして海外ともコミュニケーションを図ろうとしている。1年ちょっとの間にAさんのコミュニケーション能力が非常に向上したのは私も感じていた。留学プログラムに参加できればさらにAさんのコミュニケーション能力は磨かれ、レベルアップして帰ってくるだろうと期待をしていた。しかし、留学プログラ

ムの選考結果は不合格であった。どのように評価されたのかは分からないが、書類だけでは他の4名の生徒と大差なく、差をつけられたのは面接だと考えられる。コミュニケーション能力を売りに面接に臨んだが、コミュニケーション能力が面接の瞬間に発揮されなかったのか、そもそも力が足りなかったのか、もしくは他の事柄で落ちてしまったのか、分からない。しかし、カンファレンスで先生方とお話した通り、資質能力が身についたかどうかを判断するのは難しいということを改めて感じた。私は長い間Aさんを見てきて、Aさんの成長を分かっていたが、その瞬間だけを評価するのは非常に難しい。「資質能力とは？」という問いについて今後も考えていきたい。

教師像の転換

ミドルリーダー養成コース2年/福井市明倫中学校

北川 夏帆

カンファレンスを終わると、ごちゃごちゃしていた頭の中が整理され、霧が晴れたような気持ちになります。語り始めたときは、実践報告やお悩み相談のようなものだったのが、次第に自分を客観視するようになり、「これから自分はどのようにしようか」と今後のことを考えるようになるからではないかと思います。

今年度初めて異動を経験した私は、前任校とは大きく環境が変わり、自分がこれまで積み上げてきたことや、学んできたことがあまりにも通用しないことが辛くてたまりません。いくら生徒にはたらきかけてもなかなか響かず、こちらを向いてくれる生徒もいますが、全体に浸透していかないため、学年や学校全体といった集団としての成長を図っていくことが難しいと感じていました。この現状を誰に相談し、どのように連携して解決していけばいいのかもわからず、孤軍奮闘しているような状況でした。

しかし、それは当然のことであると同じグループになった先生方が教えてくださいました。いつだって異動先には、すでに同僚関係やシステム、雰囲気などが出来上がっていて、そこに新参者として入っていくのは何歳になっても、どれだけ経験を重ねても精神的に負担がかかるものだと、今の私の悩みを共感的に聞いてくださいました。そしてそこから、「管理職の立場として、この状況をどうとらえ解決を図るか」や「職場の状況や職員同士の関係が自分の活動にどのように影響してくるのか」といった切り口で話が展開されていきました。このように様々な立場や視点から考えることで、自分の現状をより立体的に見ることができたカンファレンスでした。

私は今、教師としての自分の転換期にあるのだと思います。理想と現実、求められていることと自分がやりたいこと、そして、目の前にあることと未来のこと。それらの間を行ったり来たりしながら、漠然とした問いが私の中でやみません。

「いい教師ってどんな教師だ」
 「何をもっていい授業というのだろうか」
 「子どもたちに対して、私はどうあるべき？」

校則、授業規律、生徒支援、集団生活、そして個別最適、主体的に学ぶ姿勢、協同的な学び…。国の要請や学校現場で求められていることはたくさんあるのに、私は、子どもは、学校は、ぜんぜん変わっていないじゃないか。このままでいいのだろうか。このような考えに陥ってしまっている私は、この頃「自分らしさ」まで失ってしまったように思います。

こんな今の私には、今回のカンファレンスで、ある先生がおっしゃった言葉が必要のように思われました。

「国が言っていることと、目の前の子どもを同じに考えてはいけない」

「自分に足りないものが多すぎてつらい」のだと思っていたのですが、実はあれもこれもと身の丈に合わない量の荷物を背負いすぎていたから、つらかつ

たのかもしれません。何が求められているのか理解しておくことは大切だし、自分が追い求めていることも間違いではないと思います。でも、それが目の前の子どもたちに当てはめられるかは、また別の問題なのです。

そう思うと、私の考えるべきことも変わってきます。大きな目標や理念よりも、もっと身近なところに目を向け、ケースバイケースで対応していくこと、「この子にとってどうか」という見方や考え方をすることが今の私には必要だとわかりました。

どうやら私が「こうあるべきだ」と思っていた教師像は、これからの教育には少しそぐわないものになってきているようです。教師としての使命感や責任感に食い尽くされて動けなくなってしまった今を、これまでの価値観や自分の中にある固定概念を抜け出さなくてはならないと強く感じました。改めて目標を見直し、私が教師である意味を考えていこうと思います。

5月カンファレンスに参加をして

学校改革マネジメントコース1年/埼玉県立上尾高等学校

前橋 俊輔

1 はじめに

福井大学教職大学院・東京サテライトで、5月カンファレンスに参加をした。令和7年4月1日に異動をし、まだ2カ月の5月24日（土）に実施されたカンファレンスだ。着任した職場において、分からないことが多くあり、日々手探りの状態にあった。このNews Letterを書いている時点で、3カ月弱となるが、それでも手探りの状態は続いている。そのような中で、職場の教職員の方々に支えていただいている。また、東京サテライトでのカンファレンスをとおして、ここでも支えていただきながら、次の一步を踏み出そうと思える学びを得ていると感謝をしている。5月カンファレンスは、「学校での協

働研究の現状を踏まえて、これからの展望をひらく」というテーマのもと、午前中は、「学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望をひらく—その意味と実践（小浜市立小浜中学校 泉浩先生）」という実践報告を拝聴し、「それぞれの学校で動き始めた状況について、グループで語り合い、捉え直し展望をひらく」というテーマでセッションを行った。午後は、「新時代を生きる子どもたちの主体的な学びと育ちの評価（木村先生）」及び「求められる学習と変わる試験問題（遠藤先生）」を拝聴し、大学入学共通テスト（新テスト）試行調査等の問題等の資料を読み、学校改革マネジメントコース「学校の組

「学校の組織の現状とその課題を探る」というテーマでセッションを行った。

2 5月カンファレンス 午前の部から

午前中の実践報告において、『コミュニティ内の居場所づくりのために』の発表では、①人としての居場所づくりがあり、そのうえで、②立場としての居場所づくりが大切であるとあった。①についても、②についても、生徒と教師のそれぞれに対して、成立するようにコミュニティづくりの実践を行っている。生徒に対する働きかけ、教師に対する働きかけの両面について、『相似形』という点を意識している。この両面に働きかける取組が明確に、生徒にとっても、教師にとっても、「コミュニティ内の居場所づくり」となるように考えられた実践であった。

「コミュニティ内の居場所づくり」のために行ってきた取組は、「当たり前のことかもしれないが、この当たり前を意図的に行うことが大切だと考えている」と締めくくる。その後に行われたセッションでは、参加した各校の方からの説明と、現状の課題についての話し合いを行った。実践を進めるにあたり、また、校務に携わるにあたり、不安を抱えることがあり、分からないことがある。そのような場面に立ったとき、その「不安」とは何に對する不安なのか、その「分からないこと」とは何が分からないのか、もう一步深掘りして見つめる姿勢が大切ではないかという指摘があった。実践報告は、『コミュニティ内の居場所づくり』をテーマとした実践であったが、午前中の部から、実践を進めるにあたり、落ち着いて整理をし、先へと進むことが大切だと感じた。また、「実践をする」と構えてしまうと、肩に力が入ってしまいそうだが、実践報告にあった「この当たり前を意図的に行うことが大切だ」という視点から、今の自分から見える世界の中でできることを模索するということから始めていくことを考えた。

3 5月カンファレンス 午後の部から

大学入学共通テスト（新テスト）試行調査等の問題等の資料を読み、学校改革マネジメントコース

「学校の組織の現状とその課題を探る」というテーマでのセッションを行った。セッションにおいて、主に「総合的な学習（探究）とは？」という点に焦点があたる内容となった。その中で、「学力調査で測れること、学力は一部。社会性が育たないと学力を生かせない。教員はそれを伸ばしたい」「教師が生徒に教えるという形式ではなく、生徒が自分で何かを組み立てていく、自分が求めているものを追いかけていく、没入してほしい」「探究とは自分の関心に基づいて、自分で価値づけて、興味を持って、他者に伝えること」「子供の心に灯をつけるまでをしてあげる」「探究について話し合っているが、今私たちがしていることが探究そのものなのかもしれない」というような指摘があった。セッションをとおして、一人で考えているだけではなく、他者との対話の中で物事を考えることが、自分自身の見解を広げ、深めていく機会となることを実感した。午後のセッションをとおして、「大学入学共通テスト（新テスト）試行調査等の問題等」について考える契機を持つとともに、「総合的な学習（探究）の時間」について貴重な示唆を受けとることができた。

4 おわりに

自分自身が直面している所属校での課題に向き合い考えていることを伝え、他者とのセッションの中でその取組に異なる視点を得ること、そこから自分自身の認識の捉え直しをすること、他者の取組や、広く教育全体を俯瞰した視点から、自分自身の視野を広げることができ、気づきが得られるカンファレンスであった。

「学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望をひらく」というテーマのもとに実施された5月カンファレンスをとおして、生徒にとっての居場所を作り、教職員にとっての居場所を作り、そこで実践する教育活動を、今問われている教育課題に目を向ける中で協働して取り組んでいける学校になるよう所属校において尽力したいと考えている。

やっぱり自走する教員集団を目指したい

学校改革マネジメントコース2年/岐阜市立市橋小学校

加藤 敦子

今年度から校務分掌が変わり、歩むべき方向がなかなか定まらなかった。共に学ぶ拠点校や連携校の先生との語り合いで自分のやりたいことがなんとなくみえてきたような気はしていたが、具体的に思い描くには至らなかった。

このような状態のまま5月カンファレンスの日を迎えた。この日は、実践報告を経て交わされるセッションを通して、自分の役割とは何か、そして、この役割を通じてできることは何かを考え、明確にしたいと思い臨んだ。

実践報告「『学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望をひらく—その意味と実践—』 福井市立松本小学校 小林 千恵美 先生」の話から、これからの展望をひらく

1. 全教員での「スクールプラン（学校経営の全体構想）」づくりからヒントを得る

年度初めの職員会で、学校経営の全体構想について校長から話がある。自分は、学級経営を進める過程や学年経営を進める過程で、これに立ち返ることを心がけてきた。それは、学校全体で子供たちを育てるという意識を共有するための手がかりであると思っていたからだ。しかし、実際は、それほどこれを意識しておらず、学校目標さえ教師も子供も知らないことがよくある。これまでの私の立場では、重要さを全教員に周知することはできなかった。しかし、松本小学校のように、年度初めに子供の実態について教員で話し合った後、5月に改めて「スクールプラン」を提示すれば、松本小学校の「スクールプラン」は全教員でつくり上げたものとなり、目標の共有だけでなく、目標に対する意識の持続もされると分かった。こうすることによって、教員の主体性も引き出すことになるのではないかと考えた。

松本小学校の「スクールプラン」は、行事を見直す際にも教員間で意識されていたことは、大変勉強になった。コロナ禍を経て、私たち学校現場は教育課程を見直し、改善する機会を得たと私は考えるようにしている。なぜなら、このような経験をしなかったら、活動の意味を深く考えることも、活動の行い方を見直すこともなかったのではないかと考えているからだ。

ところが、本校の運動会は未だに行い方が定まらない。このようになった理由は、運動会が行われる時期の子供たちに、どのような活動を通して、どのような力を付けたいかという願いが明確になっていないからだと考える。そこで、今年度中に春に行う運動会の目的や願いから考えたい。そのために、学校経営の全体構想に立ち返り、5月の児童の実態から、どのような運動会（フェスティバルでもよいと思う）が学校目標の具現に繋がるかと話し合い、明確にした上で「市橋小学校 運動会」を子供たちと一緒に作りたい。

2. 教員の主体的な学びを促す「放課後の『15分チョコット語り』」、「ゆる研」・「ガチ研」からヒントを得る

授業を観た後にチョコット語り合うのもよいが、意見や感想を交流し合う場として Teams を使う方法も効果的なフィードバックの仕方だと思った。授業を提供した教員に意見や感想を伝えることで授業者も参観者も学びが深まるだろう。また、参観した教員たちが子供たちを価値付ければ、子供たちも学び方のよさを味わい、自信をもつことができるだろう。

それだけではない。ICTを使えば、個人的に話す時間を確保することが難しい教員の意見も、話しかけることを遠慮する教員の意見も吸い上げること

ができるという点において有効だ。本校では、ロイロノート内の提出箱を使って意見や感想等を共有するようにしているが、ICTの利活用によって教員の資質・能力を高めることもできると考えると、タブレットの活用法には可能性を感じる。

そして、任意参加の「ゆる研」と全員参加の「ガチ研」は、本校でも今年度から本格的に取り入れた研修だったため、興味深かった。

人によって、経験によって、働き方によって学びたい内容も学び方も異なるのは当然だ。自分なりに課題を見出し、自分なりの学びを展開するためには、

学びの場を提供することも必要かもしれないが、個人で学ぶ場を選択できるようにしておくことも今後、必要になるのではないかと考える。そこで、本校でも、全員参加の研修会と選択できる研修会をつくり取り組み始めたところだ。

ただし、研修会に応じて参加の仕方、会のもち方、コミュニティのつくり方、省察の仕方などは、まだ工夫の余地がある。そこで、教職大学院での学びを伝えながら研修主事や研究主任と共に会の在り方を工夫し、自走する教員集団を目指したいと改めて思った。

これからの展望をひらく

学校改革マネジメントコース2年/奈良女子大学附属小学校

河田 慎太郎

5月のカンファレンスでは、「学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望をひらく」をテーマに行われた。

私は、昨年度一年間配置換えで奈良教育大学附属小学校に勤務した後、本年度からは以前勤めていた奈良女子大学附属小学校に主幹教諭として戻ることとなった。これからの展望と言っても、現状は慣れない仕事に振り回されながら日々を過ごしている状況であるので、しっかりとした展望を持っているわけではない。昨年度までは学級担任として働いていたので、一日の仕事の計画がある程度立ち、ほぼ計画通りにこなしていくことができた（急な保護者対応などが必要になることはある）。しかし、主幹教諭という仕事は、一つのことをしている時に新たな仕事が出てきて、その仕事を先にやらなければならないようなイレギュラーが起きることが多い。付箋に書いて忘れないようにすることでミスや仕事のし忘れは減ってきた。とはいえ、気持ち的に疲労がたまってしまう毎日を送っている。

そのような中で、今回の5月カンファレンスを迎えることとなった。福井大学連合教職大学院のすばらしいといつも感じるものの一つに、なかなか現場で言えない悩みや相談事を聞いていただき、アドバイスしていただけることがある。今回も、現在感じている悩みを聞いていただけただけで気持ちが楽になった。さらに、時間があるときに少しでも仕事を進めておくといなどのアドバイスもいただき、週明けには少しリフレッシュして学校に向かうことができた。

さて、5月カンファレンスのふりかえりということであれば、「求められる学力と変わる試験問題」をテーマについて学んだことについても書くべきであろう。私たちが子どものころは、学力といえは多くのことを知っていること・速く正確に計算できることなど、知識偏重であったと感じている。数十年前から、小論文などあるテーマに対して、自分の考えを他者に分かりやすく伝える能力が求められる問題も出てきたが、相変わらずどれだけ多くのこ

とを知っているかは重要視されているように感じている。

今回の教材として、「フンボルト入試」があった。その場で初めて見た題材や表やグラフを見て、自分の考えを作るような入試である。正しい答えを出すことより、様々な考え方ができる中で自分はどうか考えてその結論になったかについて、題材を基に説明する力が求められる問題である。与えられたデータで、傾向をどのように読み取ればよいか、そのデータを基に自分はどのように考えたのかをまとめるような問題は、内容を読み取り力と自分の考えを関連付ける能力が試されるのではないかと感じた。このような問題であれば、多くの知識を詰め込んでいることより、その場で見た内容を理解し、自分なりの考えを作るような学力を検査することができるであろう。ただし、内容によって受験者に有利不利が生まれること（たとえば、昆虫にかかわる問題であれば、昆虫好きな子と昆虫嫌いな子で大きなハンディがあるように思う）が考えられること。採点基

準が非常に難しくなることなどがあげられた。全面的に試験問題が変わるには時間がかかるかもしれない。しかし、インターネットなどの多くの情報が簡単に得られる現在の状況を考えると、多くのことを知っていることより、どう考えどう伝えるかを問う問題が求められてくることになっていくであろう。

最後に、カンファレンスでは他校の状況や悩みなどについても聞くことができた。単位制で学年を越えて希望する授業を選択できる高校では、授業によっては定員があり、定員を超える応募があった場合出席日数などの学習状況で申請ができるような話を聞いた。そのため、学習に前向きで成績の良い子はとても充実した学生生活を送れるが、そうでなければどんどん気持ちがマイナスに向いてしまいかねないことを懸念されていた。同じ教育という業種でも様々な試みがあり、それぞれ良いことや悩みがあることも分かり、大変有意義なカンファレンスとなった。

5月の月間カンファレンスを終えて

学校改革マネジメントコース2年/福井市社北小学校

松並 千尋

5月のカンファレンスでは、「求められる学習と変わる試験問題」という遠藤貴広先生の話題提供をもとに、令和7年度の全国学力・学習状況調査、大学入試共通テストの試験問題を読みました。私は、小学校国語・中学校国語の問題を読みました。

グループでの話し合いの中で、発言した児童の意図を答える問題、児童の生活経験と結びつけた問題、探究活動や総合的な学習の時間と関連付けた問題があることから、他者との「協働的学び」や、教科の学習を生活の中で活用できるようにすること、探究活動が求められていることが考えられました。

そんな中、勤務校では、「気づき、つながり、ともに育つ」という学校教育目標のもと、子供たちが対話と傾聴から互いに認め合ったり、主体的に行動したり、学ぶ喜びや楽しさを感じられたりすることを目指しています。そのためには、子供たちが、他者を受け入れる寛容さを身に付けるとともに、自分の言動に責任をもち、自ら考え行動していく力をつけていく必要があります。だから、教師は、子供たちが他者とつながるよさを感じられるようにしたり、自分で意思決定し行動できるようにしたりしなければならないと感じています。また、子供たちが「学校が楽しい」と居場所を実感できるようにすることが、課題を克服するためには必要ですが、子供

たちに必要な力を育てていけるよう、勤務校の研究主任として、学校の先生たちに働きかけていきたいと考えています。

また、午前中のセッションで話題提供を行った小浜中学校の泉浩先生が、「いろいろな花は、個性を出して場を彩る。そして、先生たちが、それぞれの個性や得意なことが発揮できるのに必要なのが、安心感や有用感である」と話していたのも印象に残っています。子供たちだけではなく、学校の先生たちも安心感や有用感を感じられるようにすることも、子供たちを育てていくことが必要です。先生たちが協働して教育活動を生み出していくことで、子供たちに還元できるからです。

今年度も、それぞれの先生たちに目標設定をしてもらうため、個人研究「マイプロジェクト」を設定し実践を重ねていくことを校内研究体制として取り入れました。また、それぞれの研究を支えるために、チーム(Co. Labo チーム)も結成しました。今年

度は、より先生たちの主体性に任せるために、先生たちの話し合いでチームをつくりました。

先日、チーム会議を開き、1ヶ月間のマイプロジェクトの振り返りや今後の展望について話し合いました。チームごとに活発な話し合いが行われていました。また、職員室でも、チームの先生たちで集まり、授業の相談をする様子が見られます。さまざまな年代の先生たちでチームを組み、対話の機会をもつことで、孤立した学びではなく、支え合いによって、先生自身も学びが深まることを感じてほしいと思います。

また、私自身も、高学年の担任としても、学年主任としても、研究主任としても、特別活動担当をはじめとしたさまざまな先生とつながり、子供の居場所づくりを支えたいと思っています。そうすることで、自分より上の年代の先生と下の年代の先生との関係をつなぐことができるようになりたいと思います。

特集：国際展開

エジプト・日本教育パートナーシップ人材育成事業 (EJEP-HRDP)第 15 団研修



で開校され、日本の教育に学びつつ、子どもたち中心の主体的な学びを中心とする学校づくりへの挑

エジプト日本学校(EJS)のプロジェクトは2018年以来現在に至るまでに、既に50を超える学校がエジプト

戦が進められています。福井大学教職大学院では、この新しい学校を担う先生方の専門性形成のための学びと研究の支援を2019年以来担当し、現在までに15回、600名の先生方が福井で学び、エジプトでの新しい学校づくりに取り組んでおられます。今回は第15団として39人の方々が5/12~6/6の約1か月にわたる研修に取り組まれました。附属義務教育学校をはじめ、福井市や小浜市、高浜町の学校や

こども園を訪れ、実践を通した学びを深めることができました。以下は、閉講式での代表 NABAWY MABROUK NABAWY ABDELWAHED さんのご挨拶です。

ご列席の皆さま

本日はこのような素晴らしい機会をいただき、誠にありがとうございます。私は、エジプト・日本学校の教師研修団第 15 期の一員として、ここ福井大学にて行われた今回の特別な研修プログラムの締めくくりに、代表としてご挨拶させていただきます。

この貴重な研修を通じて、私たちは多くの学びと気づきを得ることができました。まずは、この研修を高いレベルで運営し、温かいおもてなしと刺激的な学びの環境を提供してくださった福井大学の皆さまに、心より感謝申し上げます。この研修は、エジプトと日本の教育パートナーシップの実りある成果であり、文化と知の統合を体現した素晴らしいモデルであります。「人づくり」を根幹に据え、価値観に基づいた教育、規律、相互尊重、チームワークを重視する教育観に基づいています。

研修初日、私は次の三つの大切な教えについて触れました。一つ目は小さなことにこそ丁寧に目を向けること。二つ目は、見聞きしたことを丁寧に記録・記述すること。三つ目は経験したことを自国の教育現場にどう活かすかを常に考えること。この三つの教えは、私たちの学びを深め、研修をより有意義なものにしてくれました。小さなことへの観察を通して、教室での学生や教師の立ち姿、声のトーン、机の配置、教師の笑顔に至るまで、教育の本質が細部に宿ることを学びました。記録を通して、私たちは自らの内面を振り返り、出来事ではなく、そこに込められた思いや変化を捉え直すことができました。そして、現地での体験とエジプトの現実を結びつけることにより、単なる模倣ではなく、自国の文化や環境に合った形で応用するための視点を養うことができました。この研修では、理論だけでなく、実



際の教育現場での「プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティ」の本質を体験することができました。そこには、共に考え、観察し、率直に話し合い、授業実践を見直すという、生きた学びがありました。また、真のプロフェッショナルとして成長するためには、講義を聞くだけでなく、信頼と対話に基づく継続的な学びの場への参加が必要であることを実感しました。日本の学校現場で見た教育の核心は、「子どもが主役」という哲学です。これは単なるスローガンではなく、日々の実践そのものであり、子どもが受け身ではなく、能動的に学び、自らの意思で選び、責任を持って関わる姿がありました。私たちはこの「子ども中心」の学びを、エジプト・日本学校においても実現し、広めていきたいと考えています。それは、教育における権威と意味のバランスを取り戻す重要な鍵となるでしょう。



本日、私たちは二つの使命を胸に帰国します：一つは、この経験を「形」ではなく「精神」として伝えるアンバサダーになること。もう一つは、この教育哲学を自国の文化と現実 に即して、柔軟かつ誠実に広めていくことです。最後に、日本の深い知恵を表す言葉をご紹介します。「ちりも積もれば山となる」「小さなことが、大きな違いを生む」

私たちは、この旅で見つけた気づきと学びを持ち帰り、それぞれの場所で、小さな変化を積み重ね、やがて大きな違いを生み出していきたいと思います。この研修を支えてくださった全ての関係者の皆さまに、心より感謝申し上げます。そして、教育の未来を切り拓く灯（ともしび）となってくださることを願い、私の挨拶とさせていただきます。



どうぞ、皆さまお元気でお過ごしください



お知らせ

Schedule

7/12 Sat.	7月月間合同カンファレンス A 日程
7/19 Sat.	7月月間合同カンファレンス B 日程
7～8 月	夏期集中講座 Cycle1(a:7/26.27.28), (b:7/29,30,31) Cycle2(a:8/2,3,4), (b:8/5,6,7) Cycle3(a:8/9,10,11), (b:8/18,19,20)

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_n1@yahoo.co.jp までご連絡ください。



【 編集後記 】

今回の原稿を読ませていただき、それぞれ様々な悩みや葛藤を抱えながら正解のない道を進んでいこうとする、そのプロセスを十分感じることのできる、読み応えのあるものばかりでした。そして、こうして原稿を書くことで、今の自分を改めて見つめ直し、一歩でも前という強い思いも伝わってきました。エジプト教員研修で研修員はよく“旅”という言葉を使います。院生にとって、教職大学院は実に貴重な“旅”になっているように思えました。(S.K.)

教職大学院 Newsletter **No.197**

2025.7.26 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院
福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学
連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp